

देवस्थानं

樓神

第十號

行發會窓同院學山祖

大正十年七月十五日印刷
大正十年七月二十日發行

校歌

【一】 身延の山は千早ふる

神も恵を垂れぬべし

賤心なき里人も

ここに心をとめぬらむ。

【二】 天竺靈山日域の

比叡の山にも勝るぞと

傳へ聞きしも理りや

上行菩薩の栖神地。

【三】 こゝに集ふて一乗の

御法を學ぶ輩は

皆これ本化の聖教を

脊負ふて立つべき柱石ぞ。

【四】 天晴れざれば地は暗し

今や吾國蒼生は

思想の闇に迷ひつゝ、

行く手の道を失へり

【五】 是れ誰が作りし罪なるぞ

是の罪誰が作りしぞ

永世の闇を照すてふ

燈臺守は誰なるぞ

聖誕七百年紀念

棲

神

第十號

祖山學院同窓會

對

帳

第十號

廬山學刻同家會

聖鑑小百平身念

目次

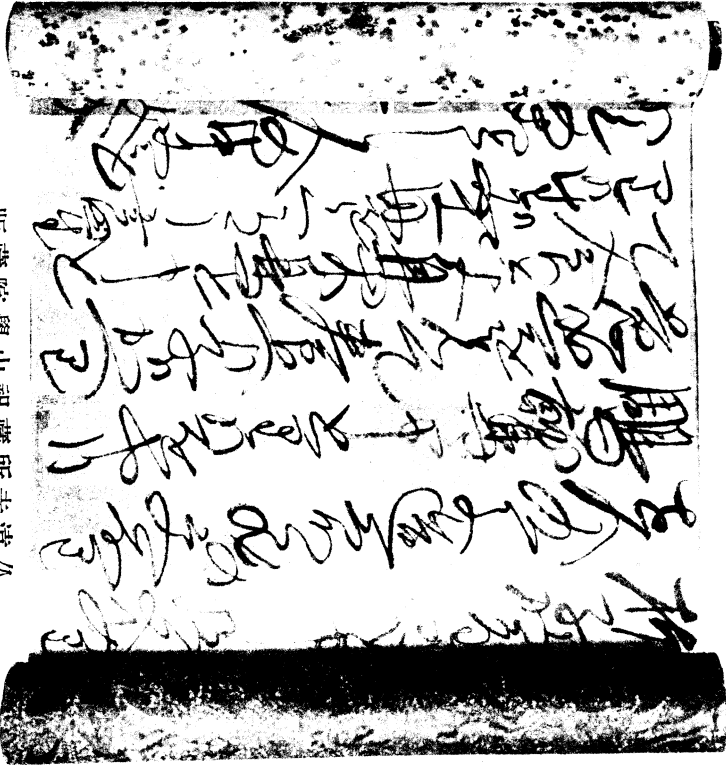
□ 卷頭の言	龍山日淵謹草	(一)
□ 聖誕七百年恭賦	延山日叡上人	(五)
□ 立法華肝要集(承前)	清水龍山	(一七)
□ 佛教史上に於ける日蓮教義の特色	藤田光肇	(二〇)
□ 鎌倉殿中間答考(承前)	堀龍淳	(二四)
□ 日本佛教史上より觀たる日蓮聖人	藤田沼南	(三〇)
□ 成佛論祖判文證類集	荒木經明	(三二)
□ 三熱の炎と偉大なる暗示	川口智隨	(三七)
□ 布教傳道の規範	辻能學	(三九)
□ 日蓮主義鑽仰の氣運	志村皓堂	(四四)
□ 善日鷹の使命	小林峰月	(四八)
□ 改造の眞意義	かなめ	(五〇)
□ 宗教的體驗の價值	太田純志	(五五)
□ 蓮華色の出家を讀みて	泰觀行	(五七)
□ 聖き涙	高瀬教闡	(五九)
□ 聖誕七百年に際して世人に訴ふ	結城瑞光	(六三)
□ 奉迎七百年聖誕	戸田峰仙	(六六)
□ 自覺せよ青年僧侶		

□ 虹影の凝視	岡 鳴 月	(六九)
□ 學問の軌範	高山 惠忍	(七一)
□ 聖誕の警鐘は鳴る	德光 泰良	(七三)
□ 古きノートの中より	南陽 榮昭	(七五)
□ 過去より現在へ	江原 亮勇	(七六)
□ 聖誕七百年にちなみて	津田 春曉	(七九)
□ 身延の夕暮	高崎 一二	(八〇)
□ 偶感	井無田 壽水	(八〇)
□ 留學生及び卒業生		(八〇)
□ 三月の窓から		(八三)
□ 同窓會記事欄(一)(二)		(八五)
□ 文學部から		(八七)
□ 講演部から		(八八)
□ 運動部から		(八九)
□ 會計部報告		(九一)
□ 祖山同志會設立趣意書		(九四)
□ 校歌		
■ 日蓮聖人御眞蹟阿佛房御書(口繪)		
■ 校旗並に院長教頭御肖像(口繪)		

日蓮聖人御眞蹟阿佛房鈔

抑おさぎ子はかたきと申す經文もあり。世人爲なし子造こぞ衆しゆ難がたう
 の文なり。鴨か鷺さと申まをさりばなやは慈悲をもつて養へば子
 はかへりて食をとす憂うれ患わと申まをさりば生なは必ず母をくらう、
 畜生かくのごとし人の中にも云々

(縮遣一九五六頁)



廬山學齋集卷之六

(總數一六五頁)

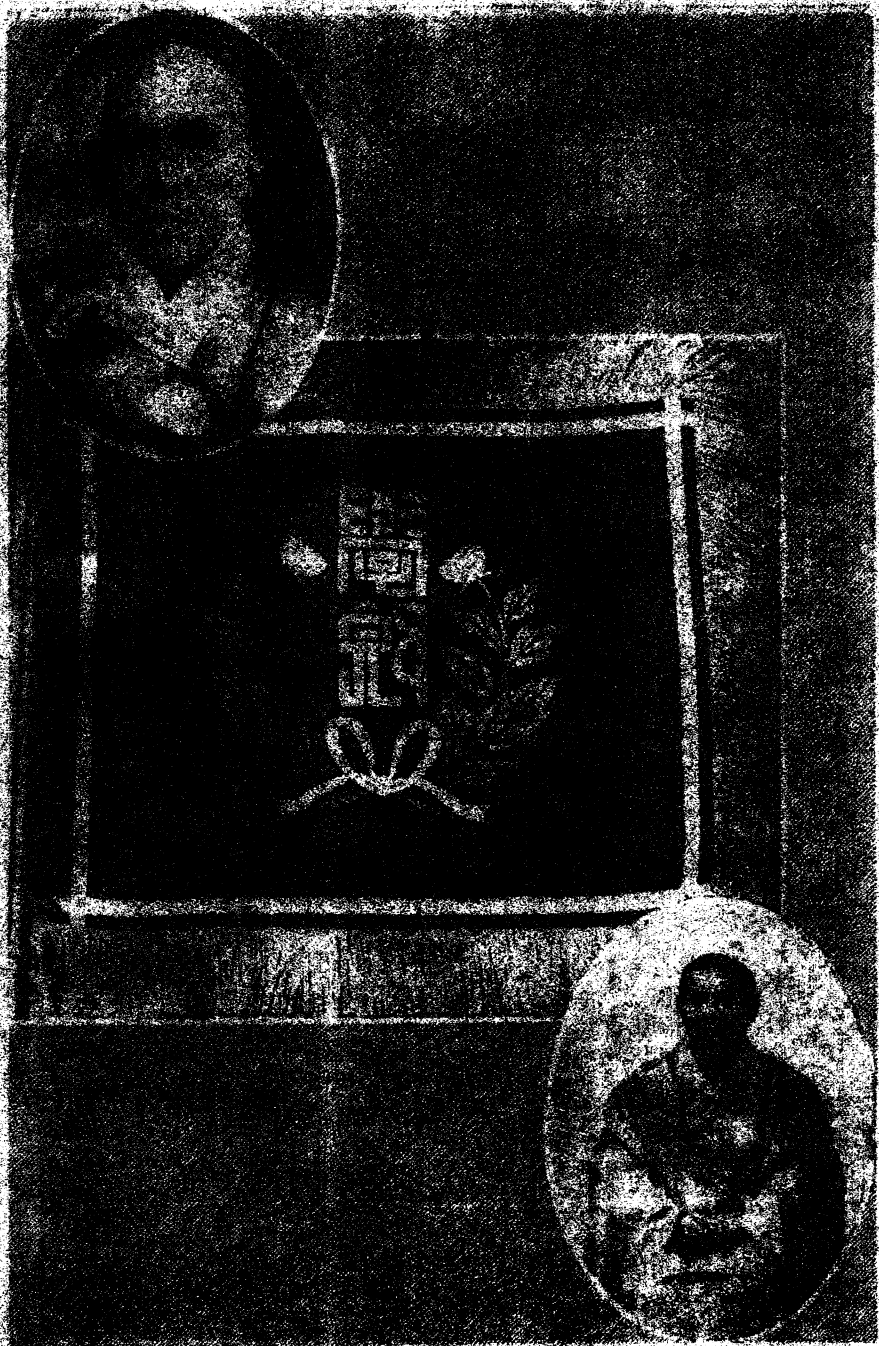
書五卷のこころ人の中へまゝ
の文は、
日影華人職異超同報祖傳



正僧本關頭教下左

旗校央中

下現正僧大泉小長院上右



五衛本顯輝才 五 中央對 五 五衛本顯輝才

聖誕七百年紀念

棲神 第十號

祖山學院同窓會

卷頭の感

本年は實に不思議な年である、而も此日本國に於て何れも法華經に關係ある聖德太子、傳教大師、日蓮聖人の御三師が御揃ひになつた不思議な年である、其中で聖德太子は千三百年、傳教大師は千百年、宗祖は七百年である何れも法華經に關係ある所以は、聖德太子は勝鬘經維摩經法華經の三部を以て鎮護國家の寶典とせられたのである、而も三部の内で勝鬘經と維摩經の二經は畢竟或る特殊の因縁を以て御用ひになつたのであるが中心として最も大切なものは法華經であつたことは勿論である。此のことは太子の御傳記が明らかに證明してゐる、のみならず法華經に就ては支那からわざわざ御取寄せになられた

のであつて其邊から見ても法華經中心なることは言はずもがな。委細に云へば勝鬘經は全く勝鬘夫人の事蹟を御説きになつたもので、時の推古帝が女帝で在らせられた御因縁をもつて御講讃に相成り、維摩經は在家有髮の居士の身を以て而かも佛法弘通する邊より御自身に倣へて講疏遊ばされたものである然し乍ら論議多々ありと雖も國家鎮護の法とすべきは勿論法華經である、從て太子は資生產業皆與實不相違背を根本として政治萬端、凡て法華經實相の理より割り出して御用ひになつたことは分明である、此事に就ては諸學者又相一致せる太子觀である。

次に傳教大師は既知の如く天臺宗を支那から傳來したお方である。法華經を以て依據とし四宗融合と云つて眞言、禪、戒律を併用せられたが、是等は以偏助圓の意から三宗を併用せられたので、中心は終始一貫して法華經主義であつた。

扨て此の本化の宗旨は改めて云ふ迄もないが同じ法華經を以て出離生死のみならず此を國家の上に用ひて根本經典としたことは三師一貫した所である。

此の三大偉聖が不思議にも揃つて紀念祭を迎へたと云ふことに就て本化の宗祖は一會深刻に思考すべき何等かの表徴を認めるであらう、外でもないが法門上に於て一代聖教三重配當と云ふ教相がある、その法門は昔迹本の三を滅後正像三時に配當する、そこで爾前經たる昔教は正法時代の教である、次に迹

門は像法に弘通すべき教で本門は勿論末法である、其上正法時代に行はれた教は像法に來れば無益に成り、又末法に來ると正像二時代に於て行はれた教法は利益を失つて無用となる、只本門の教法のみ流布すべき時代である是が昔迹本一代三重の法門である。

茲に不思議を感じる事は三師共に紀念に當つてゐるが前二聖は御入滅の記念で悲しい紀念である、然るに吾祖は御降誕と云ふ日出度い嘉辰を迎へたと云ふ事は何を表徴するか、夫は彼の傳教大師は像法人、弘布の法は迹門の教、聖德太子に至つては勿論である、即ち兩聖共に法華經本門の立脚地でないことは誰人も異論がないのである。

聖德太子傳教大師の出世時代は像法であつて、其時代に弘法すべき人が末法に來て悲しき紀念となるとは畢竟像法時代に行はれたる法が末法に來つて利益を失ふと云ふ事を表徴するものではなからうか。吾祖は降誕である、末法應時別頭の大法を盛んに弘布せられて末法萬年の闇を照す大導師と忝けなくも仰がれ纏て本門戒壇建立の曉を見るとは實に有難き紀念と拜し奉ることである。(文責在記者)

聖誕七百年恭賦

疊韻二偈

龍山日淵謹草

聖誕于茲七百年。

一天四海教風新。

大慈爲室忍爲座。

自是閻浮未有人。

七百閱年降誕春。

別頭教化一天新。

蓮華清淨將誰在。

日月光明即此人。



立法華肝要集 (承前)

此ノ能德自然自在御事ナルベシ成佛肝要也付之若所云成佛肝要何經歟惡人女人二乘闡提皆成佛道、
法御座乎是意不私ノ料簡天台大師ノ玄一云

諸佛明佛往昔所行因果悉皆被拂威是方便非今經之宗要等云云

玄旨 三句等 五箇

一念成佛 即身成佛 無作三身

無思無念 境智相應 一言口傳

一、惠心流ノ相傳義云 心境ノ義ヲミテ、理境ノ一念三千等云云付之無盡ノ義ニ在之委細ハ如彼書其可見之
付之

理境 一念三千……自證本住形

……相傳此〇〇三觀無勝劣等云云

修境 一心三觀……其上ニ梅櫻見智

理ナル三千ヲ事相ニモ

天真獨朗

當家

妙法蓮華經

理一念三千
事一念三千

三千三觀ニテ心圓物照ニモ本
法本依妙法也心モ妙法ナル事

國土世間
法体理具

正教本處會
諸佛内證等

又彼轉抄云理境ハ不變修境ハ隨緣等云云

大聖人ノ仰ニ無念有念不變隨緣妙法蓮華經貴貴

一、爾前ナシド千佛三千佛何度諸佛ニ寄合給事ハ雖說分身ト不云事在之釋付之ゲニモ如爾者分身ト說之テコソ釋迦

本佛分身一体甚深々々又顯本ノ時モ他佛ニシテ寄合玉ハバ燃燈空王燈明等ニテ御座ベシ此經ノ意ハ分身ナレバ釋迦

前々ノ佛ニ本佛、前々ノ佛又本佛ナルハニ釋迦代々前々ノ惣諸佛ノ本佛ニテ御座セバ分身又久成ニテ御座ベシ、体影ノ如

仍シテ釋ニ久成ノ事ニ前佛又前佛御座、今日釋迦一佛顯本肝要ト云取意又本佛釋迦長短ニモ釋迦本佛長遠ノ理釋

給シ取意對之分身ハ現在ニモ貴顯本之時モ貴也

本地久遠釋迦中佛々迹内證今日釋迦顯本内證古今義

文句九云菩薩ニ有三種下方他方舊住ナリ、下方ハ即本日ノ所化ナリ

故無執近之謂他方舊住俱有二種一從法身應生者、往世先得無生或已先聞發迹顯本設未得聞報盡受法性身於法身地自應得聞長遠之說是故應生菩薩多無執近之謂二者今生始得無生忍及未得者咸有此謂也

文句九云釋品如來者十方三世諸佛二佛三佛本佛迹佛之通號也壽量者詮量也詮量十方三世二佛三佛本佛迹佛功德也今正詮量本地三佛功德故言如來壽量品

私云懷中決云取意釋迦三世諸佛本遠之事在之予兼思惟スル處二文符合悅喜久年也

一、明德元年上旬歲次重光協洽五月七日之夢自蘭折○○二十料簡正体定無之但所瀉深義粗示○論後日間書所詮所妄病之所住也無正体事後日○○

一、壽量事 文句云金剛已前有量金剛已後無量爾者無量云事、餘經多之同今經乎思處案云又上御義也不可爾其明文言之無量文言、無始無終可多衆未知之說教、次第壽量無誰知乎內證自元妙覺本覺極位御座也爾者何ノ經如法華顯本乎、文言尤可有於餘經文在爾前判義只限於今經義在法華明之又菩薩聞壽量發願云我於未來稅壽亦如是此即諸佛同道也是ハ兼案立シタル處也 佛文在之 如上文悅也々々所詮ハ壽量品ノ教主

釋迦牟尼如來
貴可仰可レ仰

一、久遠ヲ説クハ信斗リニテ常住ヲモテ不_モ思言壽量之意ヲモテ不知不可爾又始成ニ執シテ久遠之説不知事ハ又淺猿事

ナルベシ、サレバ餘經ノ意諸宗ノ意ハ久遠ト云ハ始成ヲ捨テ、始成ノ時ハ久遠ヲ不知、今經ノ意ハ始成ノ者、昨日今日ノ執乃至三千塵點ノ執ヲ拂テ本地成ズ、開本地ノ說信久遠實相信久遠實本本來三世常住ヲ知故會三ヲ歸一開近

散名

○叡見聞書之

弘一云妙法蓮華經迹門本門無非妙法体咸真實

竹一云以釋經題初妙法兩字通詮本迹蓮華兩字通故本迹

玄二云正明本迹体性性即實相々々非久誰論其本實相非近誰論其迹實不思議故名爲一

竹一云本迹二用不論麤妙及以廣狹但據近遠以判本迹又云本中体等與迹不殊故但別名以分本迹

玄十云若於餘經不明教相於議無傷若弘法華不明教相者文義有闕

竹一云迹中之本名爲本行四教五時懷中決下云釋迦如來五百塵點之本實成是雖說久遠定其時分雖明

遠本依因得果之義顯始覺始成之說

竹七云本事已往若不借迹何能識本

玄七云本以垂迹借迹以知本

玄七云今說本門付屬一切諸佛所有之法遍得迹門法

下總歸山之後註之依妙法
導師下

事也

明德二年辛未五月二十七日必雖不
シ候斗ナリ
歸山 談夕日書也致
法門衆如案イシイチ觀料也

一、迹門初住本門妙覺事

一、因ノ妙覺果ノ妙覺事

一、妙法蓮華經体一致ナル事

一、本迹ハ說法次第機ノ勝進次第事付妙法一心

一、三世一念ノ事付古今一念
十方一念ノ々々性ハ妙法

一、初住菩薩
佛

一、四句成道ノ口傳本迹俱下
本迹俱高

一、四句成道ニ付テ五兩一ヶ口傳ニ本高迹下ノ下

一、迹門ノ初住體本門ノ妙覺ニ移ル事

一、唯事本覺口傳事

一、說必次第ヲ以テ云ハ權、實モ次第也、然ラハ次第雖有本迹修行機又々修行ノ事無之權實体別也、仍体内体

沙汰ス、本迹ハ久遠初住妙覺事也、實相ノ体一也仍妙覺ニスミ近情チ開スレバ本來平等也、不可類例

一、日什佛有本末法無本迹ノ事

一、宗明佛ニアル故法ニモ可有事落居一致

一、三世本迹可有キ三世本迹一致ナラベシ、世々ノ說法時分ハ迹、其度コト顯本ハ本久遠々々如壽量日數世々起教ノ時分ハ迹也甚遠ノ上久遠々々上答云壽量常在靈山而實不減度

一、或說燃燈等事 果後方便、付之案云、世々之出世ハ皆果後也、利益衆生シタメ也、本地壽量教主御座ベシ、其說方便者燃燈佛等ヲ或別佛ノ權說或以前ノ佛ト說玉テ釋迦ヨリ外說欠々々々量ノ以前ノ說也、是欠々々々所證顯本後ハ皆釋迦ノ分身一体ニシテ釋迦本佛ニテ御座チ他佛別佛ト說玉事ガ未本懷ノ壽量アラハレヌ事ヲ方便ト說玉也、我說ト玉說可ニ思合

燃燈佛出世ハ利益衆生釋迦同体餘佛他佛說玉事ハ非御本意我說等云云

一、發願ノ故ニ說壽量ノ口傳

一、壽量教主久遠實成三世常住分身モ亦如此本佛釋迦三世常住云云

二、本門ハ十方分身

一、本門ハ十方三世分身

一、本迹ノ事初住妙覺久近等ハ、説之次第也、實相ハ一体覺モ次第ニ進^テアリ、於^レ其ニ本勝迹劣也、實相妙法ハ一体、本勝劣ハ初住妙覺ノ近情ノ顯本也、尋云爾者爾前モ説教ノ次第也如何、答云不可爾彼ノ權ハ是實彼ノ偏ハ是圓彼麤ハ是妙ナレバナリ、本迹ノ事ハ實相圓教妙法ハ一ナリ、能化ノ近成所化ノ初住等ナレバ説ノ次第也吉吉可案可案

惠心流本迹同異下面白事在之可見取意迹門起念門不起極本門不起念々欠欠欠

一、迹門ノ念起^{ヨリ}不起未入欠乃至極等云云惠心流

又本門ノ不起念^{ヨリ}念起^ニ入當体々々等云云、付之

一、本門ノ念起^ト云^ヘハトテ只常ノ衆生ノ念^ノコトクアルヘカラスシテ而衆生ノ念^ニ同

一、又衆生ノ念^ノ本^ノコトナ也^トモ本門ノ意^ヲ以^テ妙法蓮華經ト唱申^{サバ}益^チ可^シ蒙^ル

一、迹門ノ念^{ヨリ}不起^エ入^ト云事、是^ニ不可局^ル本迹ハ説ノ次第也、サテ而本ハ至極ナリ

一、而^ラ眞實得^レ顯功由^ニ方便^{ナレハ}眞實^モ方便^モ説ノ次第也、本迹説次第ト斗^ニテハアルヘカラス如何、答權實ハ体別也、

本迹ハ体一也、偏圓寺如常、

尋云本門聞機^{モト}在^レ又不^レ聞^レ任運^ト覺^ル事在^ト大師釋^シ玉フ、然^ラ爾前ノ秘密不待時ト一歟異歟、答云機進方、

一也教ノ當体^ニ云^{ハハ}權^ト別也

一、無作三身事 深秘口傳抄可見

文云如來秘密神通之力 釋云一身即三身等云云義如抄、釋云就境爲法身、就智爲報身、起用爲應身、菩薩形經云萬法全体法身全体報身全体應

一、惠心流ノ口傳抄ニハ釋迦天台之教相事ヲ書也付之釋迦ノ教相ハ花嚴已來天台ノ教相直行機八付之其抄ニモ本門ト止觀トハ同シテ述門ヲハ識ノ様ニ書タリ、其故ハ本迹同異之下ニ本門ハ不起ヨリ念起向ノ二云事ヲ書引證止觀案云釋迦教相ト申ハ衆生之爲ニ花嚴等說玉事ヲ申也、仍テハ識何度申其マ迹門マテ次第々々進事ヲ申也、本門ニ至ハ至極ナル事彼モ存アリ、止觀ハ如釋尊立玉ハネトモ直ニ教理教相ヲ云カヘタル斗也、至極ハ一也ト彼得得意タル也、速テ天台大師ノ教相ハ釋迦ノ教相ニ勝ルヤウニ不可得意

一、迹門全不同說次第也又久近初明妙覺等如常迹門自花嚴至般若事ヲ開シテ本門實相ノ上ニ顯本實相ヲ說起不起ノ念如上止觀ハ大師得意ヲ宣

玉ナリ、仍權教ヨリ教上御座始ノ華嚴ト止觀ナスキニ說玉トノ差異也、前本迹之同異所詮不反隨緣事也、只愚存ハ彼相傳欠々々々ハ迹門ハ去年曆トモ得意不可有云テ其マナル事餘也、又物タラニ歟是レ說ノ次第也迹アレハ顯本ス又迹運本ヲ得ト云尺アリ、只カクテ是所詮不變ハ迹隨緣ハ本ト得意分斗也、不變之内ニ隨緣可有隨緣之内不變アルベシ、彼本勝迹劣ハ如常教三千ハ言々可案權教隔歷ノ不可得意、是ニモ又本勝迹劣如常實相同久近等云云

一、迹什義迹門無得道是餘也、說ノ次第ナルヘシ只久近ト與ニ麤妙一異如御書

一、無得道未得道事

一、前本迹之同異事

案云迹門ノ意ハ念念所起ノ雜念等ヲ用テ不起ノ念ニ入用之ト可案是ニモ妙法蓮華經ヲ唱申案申本門ノ意ハ不起ノ念是ニモ物ニ不染、サテ念念ニ染ヘキ申ハ不可爾、念念隨緣ノ浪雖立五塵六欲八風ニ不吹ヤ物ニ順ルハ隨緣不染、真如也、
是モ妙法蓮華經欠々

大聖人ノ仰云有念隨テ緣ニ唱申セ

一、己心ニ三身御座メ妙法ヲ聽聞之時顯レ玉ヲ、三身御座事ハ本來常住也、妙法聞奉テ顯レ玉ヲ也○玉○鏡水月等
靜々ト云云

一、涅槃常住ノ事

至貴染於心肝覺也、惣八相之常住皆常住迷性之心執着之心ニハ時々世々ニモ一世之終ハ無常覺悟御前ニハ皆
常住々々吉々可案

一、惠心ノ口傳抄ニ止觀一部ハ有相、其故ハ一念ニ建立三千、無相ハ非識ノ所識非言ノ所言玄妙深絶不可思議
境也等云云

私云大聖人ノ國土世間吉々可案申妙法蓮華經ハ
事ノ一念三千

一、序品ノ題目ハ一部ノ肝要ノ事

同抄^ニ在^レ之、私云尤然也、只口傳在^レ之、大聖人、仰^ハ要中之要等云云、是肝要也是肝要也故^ハ所詮妙法^ハ肝要也始^{ヨリ}終^{マデ}肝要也、加之一部^ハ妙法蓮華經取^レ之玄文^ハ妙法^ヲ釋^シ止觀^ハ所詮^ト吉々、惣十界三千森羅萬象生佛色心皆妙法蓮華經也南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經

一、迹門^ハ理ノ一念三千^一一念心性ヲ觀所詮心ヲ行スル也本門^ハ事ノ一念千^一色心ヲ常住ト觀シ談ズ所詮事理共行也

一、一心三觀迹門

一、無作三身本門五兩一ヶ見之^{タリ}一ヶ^ン心要^ハ境智不二等云云、私云是^モ又妙法也

又妙^ハ心、法^ハ色又妙^ハ色^ハ心^ハ色^ハ妙境智ノ教

何方^ハ至極妙法蓮華經御座候也 諸佛^ハ心^ハ妙^ハ衆生^ハ心^ハ妙

諸佛尊形法衆生像法南無妙法蓮華經

又傳教ノ御義ノ八葉蓮華座三密ヲ說玉フ等云云、爾者三密ハ蓮華勝ト可云乎、答云三密ハ諸佛之說也成佛ハ法花ナル事餘處ニ說立欠マル諸法ノ欠欠欠ハ妙法等云云

明德二年辛未六月十八日堂ヨリ下向時

一、本迹之法門觀心等教相等雖^レ不知^レ之^ヲ信取志深^{シテ}二世^ヲ祈^{ヘシ}

或人云本迹ノ法門不知^ハ等義ニ云教主、久遠實成ノ釋迦牟尼尊可奉崇敬本迹ヲ知^ハ智慧ナルベシ妙法蓮華經ヲ持^ハ

信也、本迹ヲ信シ申信也大聖人ノ流汲申信ヲ取事肝要也、戒定惠ハ正像、信ハ末法也、舍利弗ノ以信得入、又聲聞ノ非已智分不生疑惑者不墮地獄等云云、是人於佛道決定無有疑又或人云、受持等云云雖不知之知人ニ受持スレバ功德ヲ得等云云

義云當世自解之人ニ受持セズバ事タラザル義如何曰本來本有之釋迦上行ノ御法ヲ入ニ於末法大聖人御出世アリテ末代ノ衆生ニ貴賤上下皆悉遍ク施シ玉フ是ハ是好良藥也付囑御法也不レ失心也持者ハ失心也持者ハ申不失心也是代々相繼シテ御座相傳ノ御山ニシテ相々ノ師ノ手ヨリ持申事既ニ塔中ヨリ直受上行之御法也、大聖人ヨリ直受日向ノ御法也、大事ノ御法門也、如何ニモ相構々々無欠々仰テ可レ取信也可レ取信也、サテ欠イハ本迹觀心教相等知欠々尤貴尤貴神妙也、僧ノ能也、サテ不知者何度云事不レ可然

一、不レ知知人ヲ謗ラン事（失）知知人ヲ謗事（失）知不レ知ヲモ成佛可レ在事讃學匠ニシテ慈悲忍辱ノ心在リ行學在ラシ得ノ中ノ得也、相構々々不レ知仰取信唱申持申者ハ得也（藥）醫師ノ合タル藥ヲバ不レ知意服スレバ治於病、不レ知者持申コトシ加藥セン藥ニ毒制タラン如シ、知於藥人不レ知服者ヲ謗不レ知持人ヲ本迹等不知問謗人トハ申也、或大醫ニシテ可レ知不知人病アルニ一乘ノ大ナル藥與ヲタスアレバ學匠行人ノ俗男俗女ニ此妙法ノ功德ヲ説持タセ又持タランヲ讃メンガコトシ

尋云或人ト二人ノ義ニ俗男等ニハ持タセン者ヲ乎

答云俗男ハ特功德僧ハ無功德如何又代々ノ義ヲモクタク義如何又尋モナクテ無意有代々相傳ノ方欠謗義如何自語相違可レ多故欠欠或持

ト云或持タリトモサレバト申々欠也トハ相欠欠云或人トノ義ニ吉欠欠欠慢入僧チバ教訓スベシ

後ニ可書事先註レ之

一、前ノ佛又前佛ヤシマス事

一、文殊等古佛ナラバ上行殊ニ古佛

一、久遠釋迦中間迹今日ノ釋迦顯本迹本佛釋迦久遠ニテ御座セバ分身久遠釋迦欠欠

一、顯本長壽ハ只是證体ノ用、付レ之問体ハ迹本不二也爾者迹ノ体ニヨリチ顯本スレバ用ナルヘシ云云迹ヲ執情顯本情也

又顯本アル事モ先欠欠聞悟テ久本遠也迹無クシバ壽量欠明故可聞權無クシバ又本無クシバ衆生近情執留能化ヲ無常ノ

佛ト欠欠可有仍迹門正意本門正意云云又云實相本ニ在之、雖然迹ノ實相一也、又迹ノ御恩莫大也サレバトチ本實

相無カ殊ニ説也、又實相ハ久遠ニ聞ク自其以來長壽ハ實相アル命也、今日ノ迹始テ證体ナル久遠也、又衆生始悟テ久

近同事アリ其修行重ナル能化欠々々能化昔ヨリ悟修行以下欠

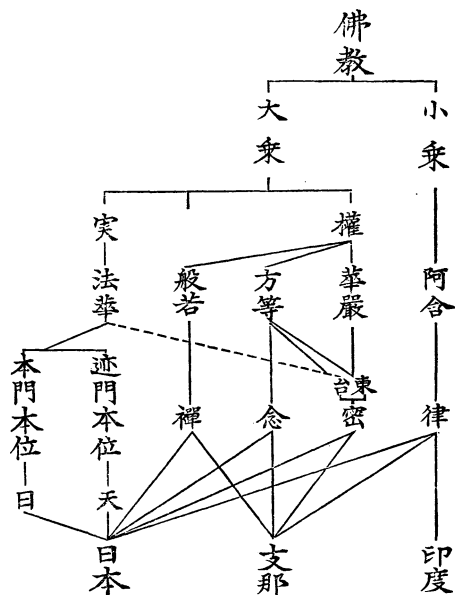
佛教史上に於ける日蓮

教義の特色

清水龍山

三國佛教史を繙く者は何人も其哲學的教理の方面に、又其宗教的信仰の方面に、我日本佛教各宗の印度支那の其れに比して、非常な進歩發達變遷異同を認むべし。同時に我日蓮教義の百尺竿頭一步を進め、否嶄然頭角を現し、殆ど全く印度產出、支那傳承の舊佛教に非ずして、聖日蓮創唱の新佛教即ち聖の謂ゆる「日本の佛法」なる風趣面目をも認むべし。余は今茲に聖誕七百年の嘉辰を迎へ聊か吾聖日蓮教義の佛教史とに於ける特色を述べんと欲して、(一)三國佛教の概觀、(二)日本佛教の特色、(三)我日蓮教義の發揮に及ばんとす。

一、三國佛教の教判上の位地



律宗も支那の南山の道宣の如きは、理想を大乘に置き、行儀を小乘に取る等と謂ふと雖も、大体に於て阿含小乘三藏の律藏に依れるものにして本朝天下の三戒壇の如き亦皆爾り。而して印度は此戒律佛教相應の國にして盛に流布せり。密教には傳教(密)弘法(密)の二家ありて、前者は支那に於て已に天台の一行禪師が法華の教理を運用して彼大日經疏を造りたれば、其所釋の本典大日

經其れ自身は其說相に徴するに、四教並說三乘得道の第三方等部の攝屬なれども、其釋疏に依れば法華教理を混和しあるを以て、亦法華に判攝す。

而して傳教大師は法華勝大日劣、正依法華大日傍依なるに對して、弘法は大日勝法華劣、眞言第一華嚴第二、法華第三と判じて盛に華嚴教理を運用して以て傳教に對抗せり。

念佛には支那及本朝にも華嚴（本朝の融通念、然等の如き）並法華の觀想念佛（天台宗）又曇鸞、道綽、善導等の口稱念佛、且又本朝に於ても法然の單元的淨土三部經（部・方等）の彌陀法と親鸞の復元的即ち法華の法、佛を運用融會したる念佛との異同あれども、今は其所依の本典に依りて、方等部に判攝す。

禪宗は自ら佛教の總府と誇稱し、總じて一代佛教を用捨し、別に所依の經典を局定せず等と言ふと雖も、其所詮の宗教は般若空無相になるは復掩ふべからざるなり、若し道元の「正法眼藏」の如き中に方便品の諸法實相、又壽量品の六句の知見、我

此土安穩の妙旨を說述することあるも、其究極猶是れ無相實相にして、未だ是れ具相有相の實相にあらず。故に彼家の空たる奪つて是を判すれば通教の當体即空の偏空（説かざる）にして、未だ別教の但空（假中に即せざる）に及ばず。況や圓教畢竟空（空假中即するの空）をや。本邦台門の古哲安然の禪を圓の空門の一邊なりと判せり。是れ稍高きに失するの嫌なきに非ざれども、安然の禪は或は許して可ならん、而も彼禪宗の禪は斷じて容すべからざるなり。

已上の諸宗中に於て唯傳教大師の密教のみは法華藥籠中の物として權實の判攝に一分法華圓實を含むと雖も自餘は絶無、悉く偏權に屬す。但し今言ふ所の台密とは、的しく傳教の密を指す。若し彼慈覺、智證、安然に至りては、蚤く既に高祖以偏（禪戒）助圓（法華）の本意を喪ひ、彼大日經と此今經と、意業所觀の一念三千の理は同じく、手（業身）に結ぶ印契と、口に唱ふる眞言とは（此二を）彼勝なりなど傍正顛倒權實雜亂以て單に方等部に攝し、法

華經及び傳教大師の獅子身虫を出すこと撰時鈔、下山鈔等の聖判の如し。右東台兩密及び傳教大師と其以後又法然親鸞の異同等は拙著『法華經要義』の「三國傳弘史論」を參照せらさたし、今詳にするに違なし。

最後に實大乘法華經の中に就て、像法時代に支那に天台、日本に傳教出で、俱に天台法華圓宗を弘むと雖も、猶是迹門の理具實相、理の一念三千以て所觀の諦境として、三諦三觀觀念法行以て能觀の觀法と爲す。是即迹門立脚地の法華弘通にして、唯是れ像法適時即ち利根上機に適して末法根鈍障重の劣機は分を絶す。是に於てか、法然をして隙に乗じて、理深（法機微劣）華解（機微劣）非機失時等の謗法を敢てせしむる所以なり。蓋し迹化の弘經は此評破を免る、能はざるを奈せん。

然り而して法華經果して是の如きものなり耶。是れ本化大士が圓實本門立脚地の事の一念三千三大秘法即ち事（手に印契の機體たる合掌印を結び、口に諸佛の秘密呪なる題目を唱ふ即ち身口二業也）理（意業事の一念三千の理を信觀す）俱密の最勝眞實の妙法を建てて、彼

密家徧權の三密の邪幢を倒せし所以なり。而して此大法は實に三國三時未だ曾て有らざる所也。此天台と吾祖との法華觀の異同亦粗『法華經要義』の如し。

之を要するに三國の佛教を概觀するに、印度は小乘阿含三藏教、三藏の中にも戒律、中心の佛教、支那は權大乘、日本も傳教大師以前は權大乘、大師は實大乘而も猶未だ法華經の迹門中心なりしを、我本化大聖人に至りて方めて本門法華經を唱道せられたるなり。

三國佛教の教判上に於ける位地略して是の如し。而して其教理の傾向及其修行の實際は

學問的——理想的——消極的	出世間的	印度
宗教的——實際的——積極的	非國家的	支那
觀念的——貴族的——部分的	（主として支那佛教による）	
信仰的——平民的——普遍的	世間的	日本
	國家的	

と分類せらるることは敢て辨を俟たずして讀者の首肯せらる、所なるべし。但し學問的、理想的、

消極的、觀念的、部分的、貴族的、出世間的、非國家的は獨り印支のみならず、日本も我日蓮教義より批判すれば亦此攝屬を免かれず、後の日蓮教義の特色の下に辨せん。三國佛教の異同比較概観略して是の如し。次に特に日本佛教の特色を述べん。(嗣出)

鎌倉殿中間答考 (承前)

當時問答の狀況を記して曰く「斯外伺候、大名諸士百司磨^{スル}肩^ヲ屈^シ膝^ヲ而列座^ス凡^ソ貴賤上下道俗男女來會^{スル}宛^カ如^ク雲霞門前成^ス群^ヲ良^ニ希代^ノ壯觀也^{ナリ}」(略注十一左)「鎌倉中の寺院は不^ニ申及^ニ三浦三崎金崎六^ツ、浦津々浦々近國は駿河甲斐伊豆武藏の寺々に申付僧俗男女聽聞御免の由所仰付也」(余寫本)

印師一度場に臨むや、獅子王の勢をなし、大乘の幡を差上、身には忍辱の衣を着し、手には妙法五字の利劍を提げ、正直捨權の弓を張り、邪正一如の矢を番ひ、爾前權門を打破り、智解辨舌縱橫無

盡、恰も富樓那の無礙辨の如く、大風の雜草を靡かすが如く、善く法華折伏破權門理を示し給ふ、而して三度の論難正に印師の勝利に歸するや、寺社奉行大膳大夫自ら宗牒を與へ四箇名言を許可す印師答曰く「四箇の名言今更御免無くとも、少しも憚るなし、先年高祖大士佐渡より赦免の時、放光寺時宗公より宗牒を下し置かる^{（本化高祖傳下十一四、攻）}今新に申す事御無用也」と。

又朗尊身は松葉ヶ谷草庵に居し給ふと雖も、此度の問答は前代未有の大事、初の仰の如く、些細の失過もあらは、忽ち流島刑架のみならず、一宗門の關ヶ原、宗祖末代、出現の本懷も唐捐ならしむと、乃ち老軀の御身を杖に扶けられ、群集の間にありて、問答を窺ふ、口には經文を誦し、心には諸佛菩薩を祈念し專念に勝利を希ふ、然るに幸なる哉、初中後印師の利となりしかば、喜悅滿面、互に顔を合せし、嬉し涙に御法衣の袖を絞り給ひ踊躍して手づから、印師の履物を直し給ふ、印師驚き且つ固辭する事再三、世の諺にも七尺去つて

師の影を踏ます、一字の恩に舌を抜くと申す事さ（あり、何卒御免被下度と、云へども朗尊聽かず、曰く「日印今度の問答に勝を制せるは、汝自身の智慧才覺に非ず、全く我祖聖人の加護冥應にあらずんば、如何に兩三度の問難に利運を得べけんや、汝が身には大聖人の心靈宿れり、然らば師大聖人に對する私の禮なり、何の子細かあらん」と）（二寫本取意此下清水龍山聖人の評あり此事實の有無は統記所評の如くならん蓋し是れ記者朗尊の心事を付度して筆せる物歟）更に以下、少しく三書より得たる疑點乃至矛盾點を語らん、先づ小林師所持の寫本は、初論に徳川幕府の事、書中日蓮宗云云の事ありと、余所藏の寫本にも亦日蓮宗云云の事あり、師曰く「日蓮宗々號を公稱するに至りしは、明治九年新居日薩和尚に初まれり、其已前は日蓮法華宗と呼べり、然れば此稱、私に仕用せる者なりや」云云以上所論最も當を得たりと云ふ可き歟、然れども二者共に所謂無銘の書なれば、確實なる材料とす可からざるは勿論、史的價値の最も不徹底なるものと云ふべし、然らば靜師版本の所論必ずしも眞なりや、是れ亦

眞摯精密なる考究の要あり、前記の如く、靜師問答記錄、達師同略注共に、寛保元年開版なり、記錄者靜師の傳を案するに、初め池田治部公に師事し、文保二年戊午位師寂せらる、や、師二十一歳鎌倉に遊び、印師と師資の契を結ぶ、後印師桑梓に入らる、や、師は京都に入り、貞和元年四十八歳足利尊氏と計り、本國寺を六條に移し、印師より遺囑の立像尊、伊佐兩島の赦牒、安國論一卷、（三門宗寶と稱す）を邀へて、大法會を修す時に、光明帝聞し召され三位僧都を授け給ふ」（佛統下三五三）由是觀之、元應元年は靜師年漸く廿二、三位僧都の位階無きは勿論、然るに三位と云ひ、又開版の時を示して、文應元年と云ふ、何ぞ矛盾の甚だしきと、先師は難せり、然れども、本國寺鼻祖靜師の記錄として傳はりし問答記、了義達師に至りて是を無下に捨去るに忍びず、多少作強付會の弊ありとしても、所謂本宗第四期文書宗論時代の必然的產物たる可し開版年月の如きも、章疏目錄には寛保とせり、從て記錄者三位僧都日靜の書とせしも何等疑點なし

又第一回問答の問者たる、十宗坊は余の寫本に依れば頭殿（執機高時歟）の持戒御師匠、誠に御最負の僧、高齡にて法然を祖となすと、第三回の伊羅護道日も八宗兼學の僧、禪と淨土を信じ、大唐迄も其名響けりと、然るに皆是れ相手を虚飾せる文字の如くにして、其の如何なる位置を有せし人物なりや予の詳にせざる所なり。

如上自家撞着の點甚だし、且く記して先輩諸賢の垂示を待たん、余先づ試に往昔の先哲に問訊せん別頭流記十三左十三曰く「予曾讀殿中間答再三識之拙議論之陋決非印上事又非日靜之筆」云又曰く「書中又言朗尊見印有勝利出而取履其乎哉妄誕至此」云云由是觀之靜師の記錄を讀破したる事明了なり、然るに版本靜師記錄には朗尊取履云云の記事全々無し、然らば即ち靜師所錄の問答記も一に止らず、そが内容の如きも、又一様ならざるか、達潮二聖共に時代を同じふすれども、別頭統記の完成は、享保十六年（皇紀二三九一）問答記の開版は、寛保元年（皇紀二四〇一）なれば、十年

後なりされば世流布の眞蹟を見たるに非ざる歟、又曰く「朗尊是時七十六歲雖老モタリ而意氣剛健宗門大事何譲門人シヤ」云云と難ず然れども、問答の翌元應二年七十八歳の寂也、故に印師に名代たらしめるも、一理あらん。尙年譜攷異に問尋せんか、攻異上廿七（舊本に依る新本に不見）「十二月北條高時命諸宗徒、與我宗徒ハシ論法師命日印爲對有利ト同下九左云「元應元年代朗師與諸宗僧論法義于鎌倉府事大有利殿中間答行于世」云云由是觀之年譜攷異は弘化四年（皇紀二五〇七）の作なれば、靜師問答記及び達師注も共に是認したるが如し。

上來問答を概論し了せりと雖も、其の結果として宗門の内外に表れたる問題に一言せん。先づ宗内に在りてとは、宗門一般通途の所談として、本國寺の所謂宗門三箇之靈寶たる、立像一体、安國論一卷、御免狀二通（註畫讚五左）を以て朗尊、印師に對し、三箇度の問答を謝し、最後臨終の時に譲り給ふと云ふ、古來の先賢、此間に何等の質疑あるを聽かず、親師傳燈鈔の如き、三ヶ靈寶付囑

の事に是非の所談あらざるより推すれば、是認したるが如く、行學朝師の如き、三箇の重寶を論せる點（本尊論史料）より觀れば、當時敵視せる本成寺派なりしが、是に對し何等の質疑を挿みしを知らず、今又更に他流に求めん、本迹自鏡編下卷（合掌阿闍梨日授著）顯本法華宗品（川本光寺）云く「將檢考陣傳カ所記門家列傳、書及陳門先哲日年譜以之駁議陳門妄傳中略永仁二甲午日印年三十一捨台宗始投身於朗師同五四日印歲三十四造立本成寺文保二戊午日印歲五十二月殿中間答起元應元巳未九月十二日殿中間答畢日靜親聽即席記之同年朗師付屬元祖奮跡松葉谷草庵並三箇靈寶ヲ於日印而日陳徒妄傳スラ日印用三箇靈寶以送本成寺者子カ曰日印若住我意於實送此珍ヲ于本成寺則違背朗師素意之大罪人也何日印如是事蹟カ之有乎同二月二十一日朗師於本土寺入寂ス日印造立本國寺以三箇珍ヲ爲之此寺靈寶物（已下略）是れ又問答及び靈寶讓與を認む。次に更に問題の外的方面を論せん、宗祖建宗已來自主獨立不屈不撓の御精神を鼓

吹せられ、慘憺たる歴史を有し、逆境の裡に生ひ立てる宗門、威武權勢に怖れず、頑冥と世に評され、遂に治安の破壞者として睨まるゝに至れり、祖滅後二陣三陣の猛者、陸續と教線を張り、唯一經王の大權を發揮し、權小偏龜群經の折伏逆化、驀地に權邪を突く事益々急なり、權門の道俗、何ぞ憎心を起さざるを得ん。中にも德行清雅なる朗尊松葉ヶ谷に堂々法陣を張ると共に、其の謙德の下に集り、一騎當千の法器、朗尊九鳳の如き有り上記の「鎌倉殿中間答」果して眞なりとせば、宗門發展史上、宗祖滅後に於け第一問題たり、此に於てか當時の政治的方面、又は思想的方面より研究の歩を進め、宗運盛衰消長史上の、確實なる斷案を得ざる可かず。

吾人敢て等閑に附したるには非ざれども、悲い哉淺才薄識是の舉に出づる能はず、然りと雖も教義の無形、人物の有形を知ると共に、教義は究め難く人物は究め易く、從て古來より、教徒の日常言動の間に顯れたる、史的研究は、吾人の最大急務

なりと思惟せり、近來文運の發達と、人智の開明とは、完全なる一大人格を要求す、是れ易より難に達せんとする、捷徑なればなり。

希くば識者諸賢千猫中一鼠の駄稿に、一縷の光明を與へ給へば、雷に大旱の雲霓に於ける比のみにあらず、「又如一眼之龜值浮木孔」徒に余一人の幸なるのみに非、是れやがて宗門の慶事なり。

日本佛教史より觀たる

日蓮上人

堀 龍 淳

(一) 序 言

大戰後に於ける世界思潮の惡化、人心歸趣の失墜は和國の岸へも漂ふて渺からぬ動搖と恐怖とを與へて居る。今の裡に根本的救濟策を怠つたならば、死地に陥らしめる程をそれ程、赤熱化の暴威を逞ふして居る。此の際此の秋靜かに日本佛教史を繙いて法華傳來の聖者、上宮、傳教、吾祖の三大

偉人の面影を想起したならば蓋し感慨無量なるものがある。而も今年は太子の千三百年大師の千年忌辰と吾祖降誕七百年の嘉會正當である。何と不思議な廻り合せではないか。更に其の三聖共に「眞俗一貫」「王佛冥合」を以て經國の理想要諦とされたと云ふ共通點を見出す時甚深の意味が存すると思ふ。

今私は此の三聖あつて始めて日本佛教としての光輝と特色が存するものであり、更に吾祖の出現によつて其完成結論に到達し臥龍点睛以て生命を賦與したものであると云ふことを史的過程を無視しない限りに於て、其大要を論じて見たいと思ふ。

(二) 聖德太子の佛教觀

太子誕生の年代異説や南岳化身説等に就ての校量研究は今の、所論でないから後日に譲るとして直ちに太子の佛教觀に入ることにする。太子の佛教觀は一言以て之を謂はゞ十七憲法及三經疏に於て盡きて居る。

十七憲法は大体上儒教道德の色彩が濃厚であるが

第二條の一君萬臣の思想は確かに吾邦固有の國體論である。然らば十七憲法は吾國體精神を以て儒教を統一せられたるものなりや、將又儒教を以て國體精神を統一歸納せられたるものなりやと云ふに共に然らず、第十條の終りに「共是凡夫耳」とあるを以て見れば實に佛教を以て其立脚とせられたことが明白である。翻て篤敬三寶の精神は四生の終歸、萬國の極終なるものであつて、此の理想の下に、有情非情、天地萬國を統一し開導せんとするもので、其の理想の内容を更に具説したものが實に三經疏である。

太子御著述の三經疏は光宅の三教五時判説を襲用されて居ることは事實であるが、これを以て直ちに涅槃宗學者なりと速斷してはならぬ。何となれば太子の佛教は學派未分の時代であつて、而も猶五時判説の承用は一往形式上に止まり其教義實質の内容より見れば、法華中心論者であつた。即ち法ヶ經疏に於て今經の諸經中王最爲第一なることを述べ、更に第一なる所以を審かにするに會前開

後の二教を以てし給ふ會。前とは三乘即一、萬善同機の義であつて爾前四十余年の經々を法華迹迹に於て攝歸融會することである。開後とは、法華本門壽量所説の常住不滅は涅槃經の如來常住を説いた文であつて、其由漸開路なるものである。故に法華經は前半迹門に於て爾前を會し、後半本門に於て、涅槃の開路たれば最後第一となすと。更に云く、壽量の常住は五時を經るの人は知らず、然らざるは知る、と是れ蓋し涅槃通途の學者と頗る其の徹を異にする所である。

已上述べた所によつて太子佛教觀の中心は略明になつた積りであるが、進んで太子が佛教を政治に授用された深旨はと、云へば勿論國益經營の術策としてであつて「政教一致」「眞俗一貫」は實に太子の理想であつた。此のことは先にも論じた篤敬三寶の精神や「諸惡莫作」の四句偈を以て子孫を導かれたと云ふを以て見るも明である。

太子創建の「眞俗一貫」の理想と法華佛教を本邦に始めて輸入し傳持されたと云ふ勳功は吾佛教史上

不朽の輝きであると共に吾等國民の一日も忘るべからざる恩恵であると思ふ。

(三) 傳敎大師と其末流

聖德太子政敎一致の理想は奈良朝、聖武、孝謙二帝の時に至つて一分具現化したと云へば云へないこともない。即ち國家鎮護としての東大寺、國分寺の建立は、天武帝の頃から源を發しては居るが勅命によつて實際現はれたのは聖武帝の時であつた。鑒真和尚によつて傳へられた律宗殊に白四羯磨の整式と四處戒担の建立は南都佛敎中に於ける一大莊觀であると同時に當時敎界風靡の狀を察するに難くない。乍然、法相第四傳の師玄昉が朝廷内道場に入出し、義淵の徒、道鏡また、孝謙帝の寵を受けて太政大臣禪師となり、臣下としてあるまじき皇位の尊嚴を冒さんとするに至つては佛敎墮落の極点であり太子政敎融合の聖旨を惡用したものと云はねばならぬ。殊に奈良朝に於ける所謂南都六宗は小乘若くは權大乘宗であつて太子佛敎の中心たる實大乘法華は其陰影だに見る事が出来

なかつた。此の意味から云へば、太子理想の一分具現と云つたのも取消さなければならぬ。如是墮落せる佛敎の救済と南都小乘の戒担を打破折伏して、叡岳高く大乘圓戒の旗幟を樹立し、遠く太子「眞俗一貫」の理想に敎理的基礎を賦與したのが平安佛敎の代表者、傳大敎師其人であつた。大師もと奈良大安寺にあつて鑒真將來の天台三大部を閲して大いに感ずる所があつた。越えて、延暦廿三年入唐還學生の勅命を奉じて彼土に渡航し、圓密禪戒の四宗を相承し在唐二年の後大同元年八月歸朝して開宗宣言をした。大師によつて開敷された三宗統一の日本天台は其玄旨を道邃相承の本覺法門に來由しては居るが支那天台の理の一念三千觀に比すれば、稍之を具現化し實際化した点に一段の進歩發展を見なければならぬ。叡山樹立の梵網戒は大師已前全然傳へられなかつたのではないが未だ小乘圈内にあつて、所謂、四儀に共して有名無實のものであつた。其の小乘を打破して純一無雜の法華圓頓の大戒を建て、國家鎮護の實あら

しめ、且は奈良僧綱の羈絆を脱して叡山の獨立を期せんが爲めには、弟子光定に向つて「我れ戒法の爲めには身命を惜まず」とまで云はれた位である。此の破邪顯正の叫びは實に奈良佛教より平安佛教への一大轉開であつたのである。

抑大師は單令用實以偏助圓の御化導であつて三宗統一も法華開顯の意に依り助道方便として、三宗を採用されたまでである。然るに其統一融合の深旨を具說されなかつた一事が禍を産むで折角の情山も後世權實雜亂の濁流をなす源となつたのである。乍然其半面、大師と同時に入唐し歸朝の後は嵯峨帝の寵遇を受けて勅許金剛峰寺の大刹に、進むで敗を取らむよりは退いて百年の大計を企てる底の攝受的陣容を整へた弘法の大軍が潜むで居ることを看過してはならぬ。傳教死後の隙を衝いて一時に平安城下に攻め入つた弘法の勢力には南都六宗の弱卒は勿論傳教門下の精銳も遂に弓矢を收めて旗下に馳せ參じた。慈覺。智證。安然（禪にも化したが）の密教化は即ちそれであつて、平安

朝の佛教を以て密教時代と呼ぶ又宜哉である。智證大師より約七十餘年にしてさまで衰頹した叡山の義學を再興せんとした慈慧僧正の門下に慧心檀那の二傑があつた、就中慧心は本覺法門を究竟高調した偉勳者として激賞する者があるが往生要集の述作によつて後の淨土開教無間謗法の由漸をなした大罪は如何にして償はむとするのであるか。以上之を要するに理觀冥想、苦修練行の支那天台より出でて、稍事的に發展を企圖して立つた三宗統一の日本天台の傳教の入寂間もなく、内は大師以偏助圓の玄旨に迷ひ外は密教の影響を受けて顯密混同、權實雜亂の謗法と化し終つた。

（四）平安末期より吾祖出世迄の概觀

弘法の布教政策が時代思潮に適合したと云ふものか、兎角平安朝の人心を收攬し得て國家の安寧玉體の平安は偏に眞言事密の獨占する所となり、天皇皇子、攝關の落飾出家、日を繼いで増加し、造寺供物また前代未聞の盛況を呈した。斯くして貴族的佛教となつた平安の密教は莊園の激増、勢

力の隆大につれて僧兵の跋扈漸く暴威を逞ふして新古義二派の争鬭、東台兩密の喧擾は年中行事の觀があつた。斯る社會狀態の下にあつた一般民衆の不満と信念の渴望とは想像に難くない。其の時機を促へて突貫したのが空也の踊跳念佛と良忍の融通念佛であつた。就中融通念佛は良忍の所謂彌陀直授の法門に發源して他力往生を主張し乍ら而も猶天台の三諦圓融華嚴の事々无疑法界の教義を巧に利用した烏鼠中立の變態佛教である。蓋し平安より鎌倉に移る過渡佛教としてはこれまた萬止むを得なかつた事と思ふ。

木曾義仲、源頼朝の擡頭によつて長袖者流大宮人の長夜の夢は破られ、さしも榮華を極めた平家一門も西海の藻屑と消えて鎌倉建府的一幕は開かれた。此の間に於ける急轉直下の社會變動は蓋し吾人の想像に及ばない位であつた。陣頭往來の腕試しから自己の實力を知り無自覺不徹底の傳統生活から脱して、人間本然の自覺に活きむとする鎌倉武士中心の彼等には奈良平安の舊宗に依つて到

底満足し得るものではなかつた。直指人心見性成佛、己心即佛を誇張する新來の臨濟、曹洞が此の機運に迎へられて、建長、建仁等の創建間もなき禪刹の繁榮は蓋し當然であつた。他力往生、彌陀悲願を標榜して立つた法然親鸞の新興佛教は縱令夫が未顯眞實の教であるにせよ、此の間の地方民衆に投じてよくも歸依渴仰を受けたのは機宜頗る當を得たものと云はねばならぬ。其他平安末期に於ける一般僧風の墮落と運命を俱にした戒學戒行が新政府の創開、社會革命に刺戟せられて其の復活を叫んで産れた南北兩京律の活動も亦、目覺しいものであつたろう。

(五) 日蓮聖人

然るに思へ時は是れ末法澆季機は是れ本末有善、國は是れ大乘有緣である。若夫れ釋尊の金言空からず、教法流布の序次規矩整然たらば法ヶ本門弘通の聖者出現は疑を容れべきではない。果せる哉建長五年四月廿八日、滿々たる太平洋の狂濤岩根を噛む清澄山上の一角、無明の闇を破つてさし昇

る旭日に向ひ雄々しくも開宗宣言の火蓋を切つた
未法萬年救世の主は現はれた。在滅經宗を批判分
類し、取捨簡擇する實教五綱の利劍と佛滅已後三
國未曾有の大燈宗旨の三秘は業に已に整呈して新
教興立の聖者日蓮の胸中には深く秘藏せられてあ
つた。四個格言の提唱は建設の前の破壊であり、
立實の爲めの廢權であつた。天地に轟く折伏の鐵
鎚は既成宗教を粉碎して一物として存在の意義な
からしめ日出後の星光を思はしめた。開宗當時に
於ける宗祖の勇姿と胸中を思ひ浮べる時常時も肉
踊り、血涌くの概がある。

前にも述べた如く、太子は法華中心の雙用權實、
通佛教家であつて、今茲に余は、東邦法華傳持者
としての讃詞を呈するに躊躇するものではない。
然し吾國に於ける法華弘通宣傳の正導師としては
傳教大師と吾祖を推さねばなるまい。但し大師は
單令用實の以偏助圓、吾祖は但令用實の廢權立實
である根本的立場の相異を忘れてはならぬ。三聖
俱に法華中心ではあるが、其の所持教法の内容實

質に於て從淺至深し最後、吾祖に至つて法ヶ佛教
の善靈勝用は遺憾なく表現究明せられたのである
或者は日本佛教の殆んど悉くが、其源を叡岳に發
せざるなしと謂つて居るが、吾祖の法華經觀に比
すれば彼猶、天地雲泥の差格なるを如何せむ。佛
囑の遺命所弘の教法は四依の動すべからざる憲法
であつた。

大師は支那天台に上歩を進めて梵網に依る大戒の
事担建立を見、稍事的發展をしたとは云へ、彼又
迹面本裏一部唯迹の法華經觀であつて、吾祖の本
面迹裏一部唯本に似るべくもない。従つて題目論
に於ても彼亦五玄を説かぬではないが攝在屬無し
て名玄の一重に貶し、吾祖の非文非義の破折を蒙
つて居る。能詮の教法既に如是とせば、所詮の法
体修行の形容に於ても高底懸隔あるまた當然であ
らねばならぬ。彼は攝相歸性、緣理斷九、苦修練
行の理一念三千觀であるが吾は即相顯性、當體全
是口唱信行の事一念三千觀で有智無智を簡はざる
唱題成佛の妙旨は實に日本佛教の完成究竟であり

又傳教滅後惠心已來の本覺法門の終窮歸結と云ふべきだ。

茲に於てか眞淨の念佛易行、天台の理觀精修何の面目かある。噫大なる哉本化の教觀、仰で信すべく伏して思ふべしだ。

(六) 結 論

聖德太子に胚胎し、傳教大師によつて教理的基礎を得た「三佛冥合」「鎮護國家」の理想は吾祖の「三

大秘法」「立正安國」の金策となり延て二陣三陣の殉教的犠牲の努力奮闘は之が具現化を物語つて居る。翻つて日本佛教の變遷過程を顧るとき、悉く是れ吾が本化一大圓教宗、結論への先序であつた根本大師の後五百歳遠活妙道と云ひ、且つ正像過稍已末法太有近の美望と嘆聲を聞くまた宜哉である。

己 上

成佛論祖判文證類集

藤 田 沼 南

祖 判 題 名	作 地	著 作 年 次	寶 算	縮 遺 頁 數	大本遺文錄丁數
戒体即身成佛義	清 澄	仁治三年 (又へ云文永三)	二十一	一〇	二十
一生成佛鈔	鎌 倉	建 長 七 年	三十四	一四	十四
				一七	三十七

御妙 法法 返尼 事御 前事	內證 佛法 血脈	一念 三千 法門	六難 九易	始聞 佛乘 義	即身 成佛 義	〃	撰時 鈔	法華 初心 成佛 鈔	成佛 用心 抄	秀句 十勝 抄	法花 題目 抄	女人 成佛 鈔
身延	（二） 佐谷 渡方	鎌倉	〃	〃	〃	〃	〃	〃	身延	塚原	清澄	安房
（弘 元）	文永 十年	正嘉 二年	弘安 元年	建治 四年	〃	〃	建治 元年	建治 三年	建治 二年	文永 八年	文永 三年	文永 二年
（安 年）	五十二	三十七	〃	五十七	〃	〃	五十四	五十六	五十五	五十	四十五	四十四
（五十七）	一、七五一	二、一〇	一、七四一	一、七二三	一、二七一	一、二〇九	一、一八九	一、六九二	一、五二三	七二八	五九、四〇五	五二九
廿五十	十四廿六	四十四	二五初	廿四十五	十九十七	〃卅六	十八十五	廿四廿六	廿二	十一 五十四	十一	九十三

御妙 法尼 返御 事前	〃	妙一 女御 返事	〃	總三 勘世 文諸 抄佛 事前	〃	御千 日尼 返御 事前	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
弘 安 四 年	〃	弘 安 三 年	〃	弘 安 二 年	〃	〃	〃
六 〇	〃	五 十 九	〃	五 十 八	〃	〃	〃
二、〇八九	一、九八一	一、九六四	一、九〇三	一、八九七	一、七五六	廿五十四	廿七卅二
三十卅八	廿九四	廿八卅六	廿七卅七	廿七卅二	廿五十四	廿五十四	廿七卅二

以上即身成佛論ノ文證ト見ルベキモノ也中ニ於テ天台附

順佐前ノ御作アリ在島本意顯發ノ御著作アリ佐後流通還

昔ノ作アリ而シテ又對告衆ニ隨テ内證外用一途ヲラザルアリト雖

モ要スルニ當家成佛ヘ十界所有ノ當相ヲ本覺眞体トスルニ

結歸スルニ在リト可謂也

然リト雖諸先哲ノ議各々異点有之大イニ研鑽スベキ義門ナリ

吾人モ又時得自己ノ見解ヲ發表セシム事ヲ期スト雖モ今ハ唯

先キ學師カ余ヲ授ケラレシ成佛論祖判文證類集提テ而

己之ヲ以テ斯道攻究者カ鑽仰ニ一助ヲバ吾ガ意既ニ満足シ

三熱の炎と偉大なる暗示

荒 木 經 明

現實の吾々の生活を考へて見れば、全く手も足も出ない様に迄威容を失墜せられ、而かも、其中に自己の生活を、少分でも完全に、若しくは、幾分でも不満なく送つて行かんとして東西に急ぎ、南北に走り焦慮すること他その見る目もいたましいくらいである。其中に高貴の人あり、賤之男あり

賤え女ありと、夕に月を眺めて、觀念の床の上に夢を結び、朝に星を頂きて、行く所あり、歸る家ありて、其營む所は何事ぞや。昔より今に至る迄生死の九界に輪廻する事の、但に常住ならんのみを思ひて、無常の理を知らずして、生を貪はり、利を求めて、止む時なく、殺風景な冷淡な、そして又物騒な生活を、誰しも經驗しながら、表面には信義を誓ひ、友愛を示して、御互に睦しきが如く、共同し、組合して、文化生活の理想を技術的に、虚飾的道德的に、美的展開しつゝあるは、何の意義があらう乎。文明とは申し乍ら、宛然強食弱肉の時代とより、考へられない。斯かる複雑多難な、そして厄介な生活を、人間が、必要で造つたとは、何うして考られよう歟。

吾々の生活に於ける、總での活動即ち實踐的行爲も、哲學的權威ある思索にしても、無明深重の雲引き覆いたる、催眠的惰性を消失して、微妙なる我身の内に、三諦即一心三觀の曇りなき、澄めり月の眞實智を直觀して、必然的な本然の性、そ

れ自身の、自發的庭園を作るに非ざれば、餘に餘に憑もしき、菩提の素懷を、深刻に謳歌する、社會運動即ち完全なる生活を、建設したとする事は出來ないではなからう歟。

吾々は如何なる場合にも、文明の高い理想を、持つて居なくてはならない、けれども、生活の手段の爲めに、囚はれて、人類の本然性に、暗黒と虚偽を、體認しては、吾々の生存意義を示す生活は、蹂躪され、創造は破壊され、自由は掠奪されて、生活の根底を崩し了るであらう。生活は、例へば流るゝ水の如くである。彼れは無窮に流動し、寸時も滯る事なく、一刻一刻と不斷に新らしい所の、遠き未來の發展の爲めに、一躍一動して流れて止まる事なし。此れと等しく、吾々の生活の生命は、停止する事なく、何處より來り何處へ行くか遮止する時なく、流轉し、今日は昨日より現狀に缺陷不満を感じ、弱々しい生よりもよりよき生活に、絶へず憧がれ、絶えず向上發展して、

時々刻々事々物々、影響を受けて、今日の生活は全く明日の生活でないと云ふ程、時には向上すれども、多くは病的に流れ行き、生活其者に永遠に杞憂の難船を認識せしめるは、眞に驚異せざるを得ない。それ故に、生活の手段に囚はるれば、眞の生活の本然の性は見出されずして、遂に價値なき生活に傾かざるを得ない。されば生活本性の、内外相互的關係を無視して、人類生存の内面的把握を、意識せられ様乎。

人間の本性的發達を伴ふる、社會運動即ち、生活内容が、豊富なり、複雑に高まる新形式なり、社會狀態の改變なり、組織經濟的革明なりの其者が、全く人類の本性的高上に非ざる時は、贅澤と快樂とを追ふ發展となり、虚榮に憧かる、傾向を持たして、人間の眞の理想生活をして、様々な迷妄と矛盾と混亂を來らしめて、幻滅の悲哀に遭遇し、破滅の生活を招くのであらう。所謂る現在見る様な、虚飾的で俗惡で無趣味な、大仕掛けの投機的社會運動と成り、漫然と民衆の生活に、種

々の方面から、壓迫を蒙むるに至りし其れの如くである。

斯くして、惱みなき人は無く、壓迫より逃れて心遂醒酪の光りに照されて、希望の力に蘇生せんとして、藻掻き、自己の存在の意義と價値を、贏ち獲んとして、非常に複雑なる生活の地平線上に熱誠を振つて、本然の性の表現を、自己心中に獅子吼するに至るならん。

如斯之經路よりして、生の充實を計り、人生の意義を甲斐あらしめ様とする者は、其目的を果す生活の上に、勢力と費用と時間とを活用せんとして、我れに自由を與へよと叫んで、其價値を、自らの暴虐より救ひ求めんとするならん。寂かに寂かに心の奥底に、耳を傾けなば、期待に背かずして、如斯之響きを、奏する事必然たるべし。

多くの人類は、一期空しく修する事の善なくして、三熱の炎に交り、單に生活の勢望に得失止む事なくして、惑ひの上に酔ひ、酔の中に夢を結ぶは、風の前の燈籠につたう權華の、日影を待つと

等しなければ、哀れともいふべし。

豫期して、事實生存の意義は、内的自覺に據りて、其要求は高められ、そして愛や慈悲や正義や同情や理性を伴ふて、人間は密接の比翼の鳥、連理の枝のその如く、人々は生活の上に、幸福と平和と一致とを樂しんで、暮す事が出来る筈であるに、奇怪なる社會運動は、非常なる懸隔を齎らし來り、徒らに慈善とか、救済とかの美名の下に折衷的な妥協的の指導にて、侮辱を與へ、阿鼻大城の炎の底に、沈めしめ行くは、不思議ともいふべし。

今や社會の所有の者は、生の歡喜に浴する事が不可能となりて、新生命に憧がれつ、生みの苦しみを、未だ嘗つて見ざる程の、非常の勢を以て渦巻き返つて居る空前の哀史の中に、見出しつ、あるなり。それ故に、新しい燃ゆる様な、民生雜新を高調し、合理的歸着点を、鐘の如く鳴り響かさずして、冷淡に了る事が出來得様耶。

吾々は生活の不安と動搖を破つて、立つべき方

針を確かめ、そして不純なる衝動や、欲求を抑壓して、伸張發展を實現せしめたい。其價值判斷を組織せしめる者は、信仰に抱かれたる、人類の內在的本然の性、其者を確立せしむるに限ると、思索せらるゝなり。全く自己の内面的に生ける生命は、社會運動のそれに、徹底的に解決を、把握せしめる萌芽として、見るべきなれど、其實質を充たし行く力が、金剛不壞に非ざる場合に於ては、必ず必ず、急激の誠心誠意なる、果を結ばしめ、恰かも浮萍の如き生活として、奇しき社會運動の止む時なく、續き行く現今の社會狀態を考察せしめる事とならん。

先づ毎自作是念の意を以て思索するならば、生存の彌よ彌よ偶然でなく、生氣ある活力ある要求を、認識するなれど、然らざる時は、段々と底の方へ沈澱し行く生活に呪はれて、到底救ふべからざる道を展開しての曉に至りて怨むとも、何かせん、心すべき也心すべきなり。

翻つて社會運動の上に、新文明を建設して、日

の本の大命を奉すべき、人々の奥底を觀察するならば、陽炎の如きには非ざる歟。所謂軍國主義の哲理を、一度は謳歌し、續いて民本主義に走り露國の革命の起るや、其根本思想のカールマルクスの思想を崇拜し、而かも今日此頃は、其思想が内心満足する事を得ずして、ラッセルや、クロボトキンの自由の哲理を掲仰して、止む所なく、ばつばつ宗教改革の運動に、乗り出して、精神的へ精神的へと、變遷して來る者來る者に、片端より服従させられ、盲從せしめられて、省みる事なく遊牧の民のそのの如く、次から次へと移つて、而かも本覺の栖を建設せんとするは、永遠に本然の性に、瀕したる呪はれた、社會運動よと、涙ぐまざるを得ず。

所有る者よ、汝が殘酷と矛盾を伴ふて、呻きを聞かしむる時に、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如き、絶對權威と尊權を以て、苦しみのどん底より、引き上げ様とする、毎自作是念の御手を示して、汝の實踐的生活に、著るしい反省を、促

がしたならば、其處には必ず、各個の本然の性の空虚が見出され、現實生活の惱みを、確實ならしめて、初めて、深刻な自覺と、嚴肅を喚び足して恒久平和の、眞摯なる運動により、完全なる本覺の栖を、建設せんとするに至るべし、斯くして浮萍の如き生活は、如何ともする事不可能となり、自滅に至らん。そして吾々の、此複雑極まる實賤生活の、過程其者に、究極の價值を見出して、法性の空に、雲なく、實相眞如の月を浮べて、最高純粹の寂光的生活が、顯現されて、人類生存の意義が、表せらるゝに至るべし。

昔日二陣三陳と和黨共續けよかしと叫びし、日蓮上人は、絶對光明を以て、照すべき宗教の、本質的信仰を、所有る社會運動の、根底に潛在せしめて、社會の發達と俱に、人類存在の意義を、全たからしめる生に、徹した叫びを高調したる人格者なり。されば、日夜朝暮に此信仰の叫びを體して、吾々の心性の雪を拂ふならば、本源的生命の實相は、開展され、永遠に生くべき、大なる暗示

は興へられん。冥想思惟して信奉せば、其竹膜たるや何處にか消失し、幻滅悲哀の生活は、斯くして、微妙莊嚴に建設され、悦ぶべき現象は、表現さるゝならん。

布教傳道の規範

川 口 智 隨

聖愚問答抄云「佛法を弘通し群生を利益せんには先教機時國教法流布の前後を辨ふべきものなり所以は時に正像末あり大小乘あり修行に攝折あり」云云如說修行抄云「凡そ佛法を修行せん者は攝所二門を知るべきなり攝折二門を辨へずば争か生死を離るべきや」云云上の御妙判に於て明なるが如く吾々佛法を弘通し群生を利益せんと欲せば須く教機時國教法流布の前後を辨ふべき也、何とならば時代は人を造り人は教法を左右するの言葉の如く教は機に依つて顯れ機は時に従つて進退あり時は國に依つて異なり國は教法流布の如何に依つて進退あり即ち五綱に依つて時代に於ける利害得失を精

究し以て思想の遷移を大觀する方法なれば也、今は時既に末法なり法は實教即法華經流布の時也修行は攝折二門の中には折伏の時也何ぞ手を束ね等閑に附するの時に非ざるや、宜しく聖祖の「日蓮先かけしたり和黨共二陣三陣と續きて加葉阿難にも勝ぐれ天台傳教にも越へよかし」云云又「相構へ」て力あらん程は謗法をば攻めさせ玉ふべし」云云と激勵し玉ふ聖判に奉遵し攝折二門を適宜に應用し三大秘法の妙策及五個の宗教の利鋒を以て早く天下の謗法の罪を伐て頓に海内統記之望を遂げ萬法萬年廣宜流布に奮勵せざる可からず之れ吾々聖祖門下の義務にして又責任なり然れば吾々は須く五綱及攝折二門の意義を体得すべきなり、攝折二門は弘經の方法宣傳の要規也故に二門撰擇の當否は忽ち宗門の勢權教風の發揚盛衰浮沈に關係するものなれば本化門下は須臾も忽諾に附すべからざる最大重要問題也、今略して二門の意義を辯せば地体攝折二門は愛の結塊にして何れも大慈大悲の外なきなり、折伏は大慈にして與樂也即ち

父の嚴愛也攝受は大慈にして拔若なり即ち母の愛にして期する處二門共に愛の結塊なり此の大慈大悲の弘經を以て一切衆生を救濟すべきなり、抑々六百有餘年前聖祖朝に刀杖毀謗夕に遠竄流刑の大の難指數するに違あらずと雖も豪然として屈せず猛然として撓まず四個格言を以て折伏逆化而強毒之の弘通をなされし事他なし只妙法蓮華經の七字五字をば日本國の一切衆生の口に入れんと勵み玉ふ此れ即ち母の赤子の口に乳を入れんと勵む慈悲にして迷霧の間に彷徨しつゝある社會無邊の群類をして速に大悟界に安住せしめ以て即身成佛の大果を獲得せしむるにあり、然るに宗祖滅後六百四十有餘年其間憂宗教世の導師輩出せしと雖も未だ徹せず攝折相互に暴と罵り怯と笑ひ氷炭相容れず遂に大慈大悲の化導を阻礙し宗旗の不振を招きし事往々なり、此等の大師は所謂經典祖典を拜するに私意を以て評量し祖意を失ふを以て誤見を生ずるに至りしもの也、亦中古徳川時代に於ては信仰の自由も厭制せられ自己の信する正義の宗旨あ

りと雖も轉宗轉檀する事能はざりしも時機至り信仰及言論の自由たる今日にあつて吾々は宜しく時方の緣處を鑑み攝折進退宜しきを得布教傳道に盡力せずんばあるべからず、今や宗教狀態を視察するに種々なる宗教百出せり、故に宗祖當時の四個格言は六個格言七個格言ともなるべきなり、所謂社會の人心をして惑亂せしめ煩悶苦痛を生ぜしむる基督教天理教大本教等續出し眞理正義の弘宣を阻害せんとす淨土眞宗の如き甚敷に至つては經典祖典を無視し矛盾せる新義を主張するに至れり、其の新義たるや先覺者は我家の主義を盜み取り國家中心を論じ或は現實主義を論じ祖師の未來主義厭世思想より覺醒するに至れり、斯る時期に遭遇せる吾々聖祖門下は耶蘇教來れ天理教來れ大本教來れ禪宗來れ來つて眞理を較せよ汝我に勝たば我汝が跨下に出でん我汝に勝たば速に白旗を舉げよ底の抱負を以て旗鼓堂々眞理を爭ふの折伏態度に出でざ可からず、今や歐洲戰亂の影響に依り社會の人類は經濟問題或は食糧問題勞働問題其他百般

の問題に就て物質的或は精神的に煩悶し若痛を感じつゝ、ある現今の状態なり、且く物質問題は扱て置き精神の苦痛は宗教を離れて他に苦痛を免る、道なきを知り佛の教に従ひ何物乎を得んと切望して止まざるなり、其の切望たるや譬ば幼兒の空腹を感じ苦み泣ける兒に我慢をせよ明日ならば馳走すると云ふ親の言葉を以て子供は満足するや否決して満足せざるなり、之を一般社會の人間は現在生活に迂遠の事より眼前の生活に關係を有する問題明日と云はず今日の問題を解決し吾々に一大安心を與へられん事を欲求して止まざる今日なり、故に末法應時の教法即ち日蓮聖人の百般の方面に於ける御教に従ひ社會人類を救済し聖祖の御理想たる一天四海皆歸妙法の實現に勵まざるべからず、其の實現たるや實に本化門下教徒の努力に俟つものなれば身心を法華經に奉獻し、布教傳道に精勵し以て益々宗風の宣揚を期せん事を希望して止まざる耳。

◎日蓮主義とは何ぞ

一、日蓮主義讃仰の氣運

辻 能 學

近頃宗祖日蓮上人の人格及び理想が一般の學者青年並びに上流中流の有識階級の人々の間に渴仰讃仰せられつゝ、ある事は寔に異常の趨勢を爲してゐる。

其事實的證跡として見らるべき現象は國柱會、天晴會法華會等の如き上流人士を中堅とせる會合或は帝國大學以下各専門學校の吾が日蓮上人鑽仰研究の會合は數十を以て數へられ又諸新聞諸雜誌に及ぶ迄で聖人の史活又は小説講談の類を掲載しないものはないと云ふ宗教上未曾有の日蓮主義鑽仰の時代は來つたのである斯る氣運を促成したに就ては種々の原因に依ると雖も根本的に云へば世界を通じての現代の趨勢と個人的生存の必要と國家の運命とが必然的に促して聖人の如き徹底せる大人格深宏なる大理想に不知不識の間に其の標的

を見出して期せずして一般の人が此れに集り來た

つたのであつて即ち末法の大導師たるに由るのである。現代は實に切迫せる時代である人智の發達と人類の繁殖と交通の至便とは世界を日に月に狭ばめつゝある、善く云へば世界は渾一的狀態を爲しつゝ、來つて居る夫れと共に人と人と家と家國と國民族と民族人種と人種との間に於ける生存競争が時々刻々激しくなり益々切迫し來たつたのである此間に處して世界的權威を持てる宗教と道德が實際に於て無のであるから人心は自然に頽廢し日に日に危險なる狀態になりつゝある科學の發達は中世紀時代に教へて呉れた天國や極樂と云ふ美はしい夢―偶像を破壊して醜き自然の現實を我等の前に開展した、世界は今理想なき現實の慾望を充さしめ様ともがいて居る日蓮上人の聖語を以て云へば、闘諍堅固白法隱沒 時代で即ち廿世紀の趨勢たる民本主義と軍國主義二大潮流の調和を計る大主義大人格を求めてゐるのであるこれ現代に於てこの兩主義を完全に調和したる日蓮主義の氣

運を作りし所以である。

二、日蓮聖人の靈的大人格

日蓮上人は實に統一されたる多方面の大人格者である即ち「大難四ヶ度小難限りなし」と云ふ大迫害に處して御自分の主義を貫徹されてゐる其意志の強固なる事須彌山の如しと云ふが如き半面に「日蓮は泣かねども涙ひまなし」と云ふ大慈悲心を以て居られた聖人は智情意の三を圓滿に具足し之を積極的に徹底されたお方である山川智應居士は聖人の人格の偉なる点を十ヶ條に歸して居る即ち「思想の深刻」「抱負の雄大」「實行の徹底」「理想の永遠」「報恩の德操」「同情の博大」「義分の尊重」「思想の周密」「凡身の謙遜」と云ふのである斯る多方面の人格も所詮聖人自らも矢張り眞理正法に努力奮闘の超絶的精神を發揮した「法華經の行者」として又日本國と法華經との本縁的關係を明にし日本が將來の世界に對する靈的大任務を闡明して國家國民の眼を開かしむとする「日本の柱」「日本

人の師父」として任じられてゐる事は「開目鈔」
「撰時鈔」等の聖典に於て明である、如是個人として國民としても又世界的に考へても偉大明確なる抱負宣言を發し得た人は吾が宗祖上人の外に未だ其類例を見ないのである單にその宣言すらこれ程完備して出来ない況んや夫れに適應した思想内容が整然として具備して居るのであるから現代の吾が同胞が國聖日蓮聖人の御前に合掌禮拜を爲しても譽れでこそあれ決して恥すべき事ではないのである。

三、現今の日蓮宗に就て

今日の吾が日蓮宗は（各派綜合上よりの談である）寧ろ聖人の眞意を離れた宗であると吾人は敢えて云いたい吾聖人の宗教は今日の日蓮宗を產出した宗教ではない、聖人開宗宣言の眞意義は決して今日の如き分派的のものではなくて一大教團を唯一最尊無上の慈教也と斷定し宣言せられたの

である現今吾宗門内には八教團に分れてゐるが此等各派は皆聖人を直接に認めたものではなく其派祖を通じて間接に認めてゐるのである。のみならず根本に於て偏見を以つてし其聖者に反するが如き教判なきにしも非ずである上行再誕遊ばしてより既に七百年の慶事を迎へ奉る吾等宗門僧侶は先づ第一に統一的八大教團を企圖し斷行せねば宗祖に對して申譯けがないではないか此の世界の一大祝典を卜し吾日蓮宗當局者は須く分裂的教團をして一大日蓮たらしめむ事に盡力して貰ひ度いのである。

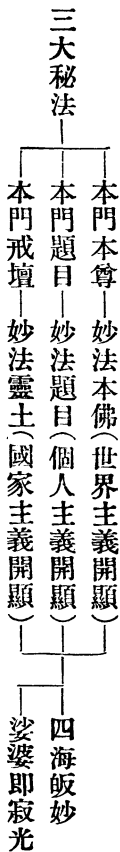
四、日蓮聖人と五綱三秘

宗祖聖人の理想信念は其宗教の内容たる三秘五綱とに顯はれてゐる五綱とは聖人が其宗旨たる三大秘法を建設するに至つた所以を闡明する五方面の意義を示したものである今其大要を圖示すれば左の如くである。

五綱

明教(知佛所說教)	宗教哲理的研究	
鑑機(因緣)	約人	(個人應化的研究)
察時(於如來滅後)		(時代應化的研究)
知國(因緣)	約國	(國性應化的研究)
考序(及次第)		(宗教進化的研究)

總結(隨義如實說)



である日蓮聖人自ら其三大秘法を叙して云はれた
「一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釋
尊を本尊とすべし所謂寶塔の中の釋迦多寶以外

の諸佛並に上行等の四菩薩脇士となるべし二には本門の戒壇三には日本乃至漢土月氏一閻浮提の人ごとに有智無智をさらはず一同に他事を捨

て南無妙法蓮華經と唱ふべし」(報恩抄 遠一五)

九)と

即ち「本門の題目」は本門の事觀として現實を深刻に徹底せる大哲學本科學の根柢を吾等に與へ「本門の戒壇」は最も自然的にして豊富なる大道徳の根柢と國家其のものを理想化する大事業の力を與へ「本門の本尊」は本佛の一念三千として其法界の全体を眞善美の且象體なりとする本佛の大創作觀と大宗教哲學觀を吾等に與へて根柢より解脱せしめる日蓮主義の抱負と内容とは實に世界を救ふべき大宗教たると同時に大哲學大道徳大事業を産み出すべき根本力たるに充分である終りに臨むで左に五綱三秘の二大要点を示す。

宗教五綱——(本化教相門)

宗旨三秘——(本化觀心門)——
——宗門八箇大事
(宗乘の二大綱領)

五、法華經の理想

法華經は宗教。哲學の根元であり飯着であり融會であつて此經の大斷以外に出づる宗教。哲學あ

ることなく此明鏡に照して見えざる「微」も亦ある事なく久遠を貫き三世を通した究竟の大真理である以上世界の文化は同じく此大綱の下に一括され飯納され而して開顯されなければならない。

「諸の説く法は其義趣に隨ひて皆實相と違背せず若くは俗間の經書治世の瞿言資生の業等と皆正法に須はむ」と。

「諸所說法」とは宗教。哲學科學文藝の思想である「俗間經書」とは世間一般の道徳書である「治世語言」とは政治法律である「資生業」とは實業である「不相違背」「皆須正法」はこれ等一切の文化互に矛盾することなく各々其根本より蘇生復活して眞實融妙の發達を爲すべきを明せるのである。

「此法門出現せば正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出でて後の星の光、巧匠の後に拙を知るなるべし此時には正像の寺塔の佛像僧等の靈驗は皆消え失せて但だ此の大法のみ一閻浮提に流布すべしと見えて候各々はかゝる法門に契

りある人なればたのもしとおぼすべし」(三澤抄) 遺一七〇六

鬬諍堅固の警鐘は徒り歐洲大陸のみならず今や全世界の空に大に鳴つてゐる日本國民たる者は須く長夜の眠りから醒めねばならない、而して國體開顯の聖者吾祖日蓮大聖人の一大理想(法華經の理想也)である大教團組織の曉に當つて徹底的に一切人類をして妙法醍醐に等しく潤ははし常寂光土の思あらしめなければならぬ此れが吾々日蓮門下として聖誕七百年紀念事業の第一歩であり又吾々一生を通じての感應生活であり又報恩生活であるのである。

以 上

善日鷹の使命

志 村 皓 堂

貞應元年の二月十六日は善日鷹が誕生の日であつた。父の重忠と母の梅菊とが共に喜ぶそのなかにも、此の鷹が尊くも上行菩薩の御再誕として、

末法の暗を除いて、民族の文化を積極的に保護し新しい生命の道を照し出す、救ひの主であらうとは、よもや思はなかつたことであらう。當時に於て氣付かぬのは無理もない。冷暖を経ること七百、我が帝國は建國以來未曾有の文明を來たし、世界の悉くが羨みと怖れとを以て見るやうになつた今日、安房小湊の浦に生れました、善日鷹即ち日蓮聖人が如何なる使命のもとに、降誕あらせられたかと心付く人が、果して幾人あるであらうか？

一体世人の多くは、時に不出世の大偉人でも現はれると、之れに對して直ちに神秘的に解釋して了つて、何の爲めに偉いのか、何の爲きに尊いのか、而して何等の使命を齎したのであるかを考案もしないで、唯だ有り難いから信する、御利益があるから祈るといふのみで、此の偉人に對して何等研窹的態度に出でないのか、大多數のやうに見受けられる。これが爲めに往々にして此の大偉人を過まり、飛んでもない曲解をしたり、あられない侮蔑的態度に出たり、または迷信に陥つた

りするのである。日蓮大聖人に對する上に於ても亦た其の通りで、鎌倉街頭に始められた四個の格言を聞いた人は、それが何の理由であるかを知らないで、日蓮といふ人は頗る喧嘩好きの人であるとか、また自らを高める爲めに徒らに他を罵詈するものであるとかと、一圖に思ひ込んでしまう。

そうかと思へば、龍口法難に御首の切れなかつたと云ふのを聞いたものは、あれは佛の御再來だといふから、其の尊い御体に變りのないのは別に不思議はないと唯だ々々難有と思ふばかりで、他に何等考へも起さないのもある。また大聖人は上行菩薩の御再誕であられると聞いた人は、何故に昔し靈鷲山に於て、釋尊御說法のその時に、上行等の菩薩方が大地より涌现して、末法に法華經を弘宣せよとの佛勅を畏みて、二千年後の末法に特に此の日本帝國を撰んで、降誕あらせられての大大小小的の弘宣であるかを知らないで、一介の漁夫重忠の子善日麿は、智慧が卓越して居られた爲め、妙法の勝れて居るのに氣が付いて、之れを弘められた

のが偶然佛勅を奉じたことになるので大方然か云ひ難すのだらう位ひに思つて、末法の初めの御出現が何等を意味し、そして我々に何ものを得せしめ給ふのであるかと云ふことを明らめやうともしないのである。斯んなことでは、恰ど折角大切に秘藏して置いた寶の玉が、何といふ名のもので、それが如何なる質で、そして何程の價值を有するものであるかを知らないで、唯だ寶ものだといひ誇つて珍重がると同じであつたり、また此の世にも稀な寶玉を、寶とも思はずに、偶々災難にでも遭ふと、斯ういふもの、ある其の爲めかもしれぬ、我が家を呪ふものであると云つて、之れを捨て、了うのと同じことではあるまいか。

廿世紀のお互ひが、世界的の大偉人日蓮聖人に對する態度を、こんなことでおくうちは、到底理想の國家社會を形成せしむることは不可能である一たび現社會に眼を放てば、身の毛のよだつ程恐ろしいではないか、思想は混亂して、社會主義デモクラシー、階級打破、勞働問題と物質的文明は

飽くまで精神的文化を阻害して、眞に恐るべき思想の墮落を來たさしめて居る、このまゝの推移に委し去つたならば、今後の世界は果して何んと成り行くであらう、釋尊は惡世末法時と云はれたが事實となつて現はるゝのだから虚偽りは毛頭ない此の濁亂の世に一大光明を與へてやらう、墮落から救つてややうと叫んで居らるゝ慈悲の權化たる大聖人を顧みるものがない、これが先づ不思議である、目がわるいのか、耳に故障があるのか、誑かされて居るのか、それとも睡つて居るのであらうか、火が足許に移つて居るのに氣が付かないのだから暢氣千萬な譯である。於此乎吾々は善日磨即ち日蓮大聖人の使命の何たるかを、人が嫌たといふても無理にも聞いて貰はねば已まないのであるそれは焦眉の急であるからである。

里見氏は云はれた「吾等が最も正しく第三者を解したいと願ふ時、吾々は彼自身になつて見る必要がある、日蓮聖人を眞に理解しやうとするには日蓮聖人の「彼」の中へ吾々の「我」を入れて見

なければならぬ」と實に其の通りである、日蓮聖人の四百余篇の御遺文は、何ものを約語つて居らるゝか。吾々は先づ大聖人の「彼」の中に「我」を入れ込んで、最も眞摯に究め奉ることを忘れてはならぬ、大聖人に接し奉つて先づ耳朵に響くものは蓋し次の如きものひであらう。

「八萬の國にも超へたる大日本國」の一切も法華經化し終つて、根城を完全にして置いて、そして進んで世界の悉くに法華經を宣傳して、正しい教の杖に縋らして正しい道を歩まして、一人でも不平のないやうに、眞の平和を來らしめ、そして此の世界を擧げて寂光の都たらしめたいと云ふより外に何もものなからうと思ふ。東洋の大哲人たる大聖釋迦牟尼世尊によりて説き出された法華經を活かしたのが日蓮聖人である。

「此ノ壽量品ノ説顯ハレテハ則チ皆ナ我カ身ヲ見ルトテ一念三千ナリ今マ日蓮等ノ類南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ルモノ之レナリ」

と講ぜられてある如く、壽量品の御説法のその時

な方法を知らないからであらう、今や世を擧げて此れに耳を傾ける必要がある、傾けずに居つては後悔する時があるであらう！

「萬民一同ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ラバ」

一大信念を起して妙法五字を唱ふる時茲に人は自覺に生き、世は義農の世となつて、眞の平和樂境を現出するのである。

善日磨の使命は實にこれなのである。(終)

改造の眞意義

小林 峰 月

現時萬邦の津々浦々に到るまで専ら改造を叫ぶざるものなし、然れども世人の唱ふる改造の言那邊を指せるや、甚だ其言の忙漠散漫にして其眞意義を解せざるは實に痛恨事といふべし。吾人をして言はしめば今時最も急務なるは先づ日本國民の心の改造なり。汝自らを知らずして徒らに改造を叫ぶは愚の甚しきといふべし、我國民は今や所謂危急存亡の秋に際するなり、徒ら

に五大強國の空名に酔ふ事勿れ、社會的改造も國際的改造も凡て個人の頭が其出發点なり。何ぞ階段なくして階上に達するを得んや、只附和的改造の叫びは寧ろ改造の意義を解せざる頑迷の代表者といはずして果何といふべき、よろしく雷同を廢せよ他を羨むなかれ、汝は汝の天職に生くべし、自己の天職に向て勇往邁進せと、額に汗して汝の生活を營め、遊惰放逸たる國民の改造は畢竟水泡空論に終るべきものにして天の福音に接するは難し、而して相互、自己の天職に進むならば其處に於て直ちに一致も調和も見出さるべし、國家社會に此一致調和を去りて國民の生活は不可能なり即ち例を以て言ふならば吾人の肉体は骨肉を以て構造せられ五管の働らきによりて始めて動作となる。若し足を切り去らんか歩行不可能なり、眼を取り去らんか判別不可見也即ち吾人の一致調和は五体具足の如き關係を有するものにして國民の相互扶助は其儘美はしき改造なり。かくするならば民力の涵

養も自然に培はべし從て國民の精神一層強固に不動の信念は益々増長し燒く能はず水も溺す能はずして強き彈力となり、困苦に遭遇しては不屈不撓となり、逆境にありては強き響きとなり堅き金鐵の如く國民全般の確固不動の精神はやがて矛盾不調和、不謙遜なる現社會の幣風一掃されん事、火を見るより明らかなり夫れ焦眉の急たる排日問題を如何せん、國民の意氣なきか當局の明なきか此急に際し國民の迷夢を醒すは誰なりや宜しく正義の前には劍を執れ人道のために銃をとれ、以て彼等米人の迷夢を破れ、民力涵養を叫び國民に一大福音を與へ永遠限りなき生命を保たしめんとするには吾人の使命に非ずや彼等の矛盾は吾人の矛盾、彼等の不平は吾人の不平彼等の悦樂は吾人の悦樂より、畢竟彼等を通く天職が吾人にある事を自覺せよ先づ自からの頭を改造せよ、世の所謂盲目にして盲目を導く徒となるなかれ。それ前述せる如く民力涵養と雖も他を以て本意となすべからず各自の

自覺が民力涵養なり即ち宗教家は宗教の宣傳に學者は眞理の研究に軍人は軍國のために自覺を以て已が使命を全とうせんとするは即ち民力涵養なり然れども根本の自覺は只信念にあるのみ堅き信念の淵底より流出せる赫々たる光明は所謂惣てのものを征服すべし。其信念の宣傳が吾人の使命否生命なり眞の信念を宣傳し以て國民を導かんとせば先づ第一に自己の信念の堅固不動を養はずんばあるべからず法華經の「不自惜身命」の金言聖祖の「此ノ臭キ頭ヲ法華經ニ奉ルナラバ砂ニ金ヲカヘ糞ニ米ヲ商ヘルガ如シ」てふ大抱負大信念を自己の大自覺大信念となし以て國民を導くべし然らば内相の示せる五大要目の如きは自然の實現を見るべきか。

最後に言はん先づ自己の頭、自己の心情を改造せんことを刻下の急務となすべし。(了)



宗教的體驗の價值

か な め

私は二人の詩人を知つてゐる、情調に於ても、色彩に於ても、経験の方向に於ても、全く違つた二人の詩人を知つてゐる。「我は感ず凡ての生命は生きたるを、さらば誰がそを生くる。夕ぐれの立琴の中に籠る如き、奏でられぬ諧音に似たる事物なるか、水より吹く風なるか、うなつき合へる枝なるか、莖を織りなす花なるか。ものふりし長き並樹か。歩みゆく暖かき沈黙か、驚きて立つ鳥なるか、抑々誰ぞやそを生くるは、神よ爾なるか——その生命を生くるは。」と、自然を讚美し嘆賞したりルケは其ひとりである。彼の眼は、自然界の矛盾も、葛藤も見ることが能きなかつたとは言へないが、よくそれを通して、見えざる世界、靈の世界、神の世界を、それにもまして観ることが能きたのである、そして凡てのものは圓滿であり完全であつた。しかし「此茫漠たる、青空の下に

停んでゐる粟粒のやうな地球も、一部は野獸が棲むてゐる山岳と森林に占められてゐる、一部は岩石と不毛の沼澤が占めてゐる、一部は陸地と陸地とを隔つる海洋が占めてゐる、耕作に残された僅かの部分とても、人間が生活のため、自然に抵抗しなければ、自然は荆棘を繁すであらう、鋤鍬をとつて土壤を耕さねば作物は手に入らぬ、斯く生命の消耗と疲勞との代價を拂つて作物が花を開くや、太陽は過度の熱を以て、これを焼き、霜雪はこれを枯死せしめる。」と、歌つたルークレシウスを想ひ起すとき、其徑庭のあまりに大なるに驚かざるを得ないのである。私は、ルケと共に自然の光榮と希望に輝けるとを歌ふことが出来やうかはた又、ルークレシウスのやうに自然は人生の敵であり、抵抗者であると考へられようか。

私の反省は、これに對して一つの論議を促がしてくる。ルケは個物の世界を完全だとは言はなかつた、むしろ悲惨であると歌つた、けれども個物の底に、深く、深く内在してゐる世界は、あり

得べき世界中、最も美麗に、最も完全であつた、凡ては調和と秩序とを保つてゐた、天地のなり出でた日より同じ莊嚴を保つてゐた。しかし彼は人間の世界を自然に移しはしなかつたか、人間の世界と自然の世界とを混同してはゐなかつたか、或る見地からは人間の世界に調和と秩序とが存在すると言へようが、圓滿完全な世界が自然の奥底に存在するとは、私に考へられないのである。さりとて、ルークレシウスのやうに、自然は人生の敵であり、抵抗者であると想へようか、私の感情はややもすれば、自然を怨み、自然を呪ふとする。彼の言葉は私の感情を燃やさうとする。しかし反省は私に教へる、自然は人生の敵ではない、人生に危害を與へるものではない、自然は人生に支配され、利用され得るやうに作られてゐる、と、このことは文明の性質を考へて見ればうなづかれるもし自然が、人生に利用され、支配されないならば、文明といふことは恐らく世にあり得ないことであらうから、さればルークレシウスはリルケと

體驗の方向を異にはしてゐるが、リルケと同じ誤りを犯かしてゐる、人間の世界を自然の世界に移してゐる、何等の顧慮も懸念もなく、自然界を人間的に觀察してゐる、そして其人間的たることを知らずにゐる。勿論、私はこれ等二天才の鋭き洞察眼の尊敬と賞讃とに價することを拒みはしなないがしかし彼等が犯かした人間的な世界と自然的世界との混同の責は、彼等とても免かれることはできないのである。

人格の本然な姿は、個人の内部の矛盾を感じ、分裂を認知して、それを淘汰し、統一せねばならない慾求を感じて、それを統一するところにあるされば眞摯な文藝は、最も之をありのままに表現するところにあるのではないか。ブランニングが永い墮眠から魂を呼び覺まさうとして燃へるやうな熱情を以て「神は頭にかいみ、惡魔は股の間より見と、」と歌つたやうに人格の分裂、矛盾、不統一を切實に意識して、その調和統一を求めようと努力する過程をありのまま描くところに文藝

の生命があり、本質がある。然るに、彼等は此分裂と統一との過程を、客觀の世界に求めたのであつた、そこに混同を來す原因があつたのである。

自然の世界より人間の世界へ、客觀の世界より主觀の世界へ、外面の世界より内面の世界へ、と私は轉化してゆかなければならない、そして内へ内へと深めて行き、更に深いところへ一步一步掘り下げて行くなら、そこに矛盾と分裂とが力づくよく意識されてくる。人類の師、永く私達の胸に幻のやうに生きてゐるプラトーンは、此分裂、矛盾、葛藤を戰車に譬へて描いてゐる「私の魂は二頭立ての戰車のやうである、一頭の馬は姿勢正しく、美しく、氣高く、長い首に驚のやうな鼻面をしていと眞白き毛に、黒き眸……これを驅るに、鞭を用ふる必要はなく、唯、勵の言葉にて足るにその伴侶の一頭は醜き形に、逞ましく短い首し、平たい鼻面、どす黒い毛をもつて、その眼は血走り、執拗にして、鞭も拍車も其効なし。」と、矛盾の姿、分裂の相、争鬭の象、霧と霧との中より私

達の身のめぐりに浮び出で、さながらに立ち振舞ふてゐるやうである。私は此矛盾に悶へ、分裂に悩み、此争鬭に刻一刻生命をきざまれゆくかに感ずる、私はこれを淘汰し、統一せねばならない慾求を感ずるのである。茲に、宗教は春風のやうに暖かい、優さしい至醇な愛もて、統一的融合的環境を創造すべく現はれてくる。鋭燦な閃光と辛烈な焰とを以て、分裂を克服し、純一の塔を築かんとして現はれてくる。しかし或論者は言ふでもあらう、宗教でなくとも倫理はよく此任務を果すと私はこれに幾多の眞理あることを拒めない、しかし、歴史はこれを裏ぎりはないか、嘗て心靈の矛盾を倫理的に解脱せんとしたのは、ストア、エピクロス、懷疑の三派であつた、ストア派は其純一的融合を徳に求めた、エピクロス派は快樂に求めた、懷疑派は眞俗の區別をなさざる点に求めた然るに其克服さるべき情慾も、不快の感も、眞俗を辨せんとする性情も皆人間自然の本性であつた従つて彼等は有間轉變の世間から脱れて自由な安

立の地を求めようとして却て世界轉變の眞中に抛出されつゝあつたのである。されば純一融合の境地は、人間以上出世間的の冥助を得て始めて可能である、従つて私達が分裂から統一へ導くものは宗教であると言ふも過言ではあるまい。

宗教と他の學問との區別を特徴づけるところのものは、無限永恒な絶對的實在なる神、圓滿完全にして絶對的價值を有する神の概念である。私が切實に憧憬し、希求し、慾求してゐるのは、絶對的價值の方面より見たる神である。勿論、かゝる神は私達に認識せられ、經驗せられることから遠いものである、蓋し現實に存するものは、凡て相對的である、現實界の存在物は必ず其原因に依存して居り、其價值は刹那刹那の要求に従つて變化する、人間が一個の慾望を充した刹那には他の慾望満足に悩むものである。従つて私達は、神が現實の世界に存在するものとは考へられない。私達は神があるとこの世界に求めずして、あるべきところの世界に求めなければならぬ。斯く言へ

ば異議を拔ぐものがあらう、即ち汎神論、或は萬有神教と私達が呼び慣はしてきたところのものがそれである。汎神論には萬物が神の内にあるか、神が萬物の内にあるかの異りはある、然し、一即今、善惡不二と教へて、私達が外今と見、惡と感ずるのは、差別相、即ち迷妄にとらはれてゐるからであると教へる。それは神の世界の不可見を、私達の性情の罪とする、しかし汎神論者が一即今善惡不二と説くにも拘らず私達の性情に存在する差別迷妄を許してゐる、従つて私達が差別迷妄から解脱しない限り、即ち現實の世界に存在する限り、神は現實を超越したものであるのである、従つて汎神論者の説も、私達の超越的神の主張と相反するものではない。あるべき世界こそ神的世界であると私達は安んじて言ふことが能きる。

リルケが、見へざる世界、靈の世界、神の世界をよく観ることができた、がしかしそれを客觀的の實と考へたときに誤りを犯かしたことを、私は前に述べた、けれども人間的世界に、主觀構

成の世界に移してくるとき、彼の思想は正しいものとなる、當間の世界、意味の世界こそあり得べき世界中最も美麗に、最も完全な世界であるから。人間が生活のため、自然に抵抗しなければ自然は荆棘を繁すであらうと歌つたルークレシウスの思想も人爲の世界に於けるあるところのものをシンボライズしたものであるのみ生命があり、價值がある。

私の反省は私を此結論にまで誘つて來た、然ししかし、茲に越え難い、深い、深い間隙を、感ずる、そして、それと同時に其間隙を融會して、氣高い統体に私を誘導しようとする努力を感じる、そこで私は意識の上におぼろながら、而も漸次に凡てのものを焼きつくさうとする熱を以て意識一面に擴がつてくるもの、尙ほ其上に、強い力が加はつて、自由に卓越した行動をなさしめるかのやうに見えるもの、其ものに自分を委ねてみた、其ものの中に没入せしめてみた、がしかし其ものは強い熱と力とをもつてゐて自分を暗い、

牢獄

に引入れようとする、そして救ひ難い墮落と破滅とに導かうとする。此力は間隙を融合し統一せずして、却つて一層擴大せしめて行く。此力は私を脅やかししはするが、私を惱ます深い間隙を越すことには役立たないのである。

扨て、私達はこれまでの叙述に於て、二つのことを暗示し得たと信する、即ち思想の終結は二元論であるといふこと、換言すれば思想には限界と制限のあること、他の一つは情意の力であるが、之れは思想の二元を統一するには多大の困難があるといふことである。然し、私達の人格的要求は此二元に満足するものであらうか、否な統一を求むるところに人格の本然な姿があるのではないか茲に私はベルクソンの言葉を想起するのである、「生命から見れば、意志は單に其一顯現に過ぎないではないか、進化運動が進化の途すがら拵へ出したに過ぎないものが、どうして進化運動其ものの全体に適用されることが能きようか、……波濤に打揚げられた汀のさ々れ石が波濤其ものの姿を示すと

かそんなことが言はれようか。」彼は尙ほ他の所で「吾人を生命の内面に導くものは直覺である。」と述べてゐる。彼が意味する直覺は硬ばつた思想の型を融合せしめて私達を純一的な境地に導くものである、彼の他の言葉で言ふたならば普遍的生命との感應である、尙ほ言葉を換へて言ふならば、全人格を以ての体験である、此体験によつてのみあるべき世界とあるところの世界とを連鎖せしめる、そして最も普遍妥當的な人性の働を可能とする、私はこれの具体化を印度降誕の救世主に於てみる、ナザレの聖人イエス、クリストに於て見る、されば宗教的体験に依つてのみ、人性の矛盾と分裂とは融合し得られ、神人の交通は可能となる、そして眞の無垢な自己の姿が現はれて来る、これあらゆる思惟の超越した秘義である、無限に汲めども枯れざる神秘の泉である。(十、二、十三)

蓮華色の出家を讀みて

太田 純志

創作と批評とは對象の異である換言すれば批評とは創作そのもの、或對象の價值を改造すると云ふ欲求から出た心理的作用である斯なると非常に難い問題になるから單に明かに知らんとする意味で論究して見やふ佛陀の宗教はその人格に淵源したその信仰證悟を生命として居る故にそが悟得の法を知らんと欲せば恰も光線の用を以て太陽の體を知るが如く教法の内容を發端として教法を活かし感化の中心となりし人格に溯らねばならぬ當時の教團に於ては朝に清涼の法味に酔ふ聖者が前夜には狂惑の奴隸であり涙に夜毎の枕を濕した哀れな女性が輝く日には靜寂な姿に目覺めたのであつただから吾々の云ふ煩惱即菩提や生死即涅槃や善惡不二は只に高座上の理論のみではない常住論から云ふ人間の靈と肉とが一つのものであるとする、の靈によつて肉が榮化せられ罪業が淨化せらるゝの

である後の根本佛教の人達も此の解結に苦悶した悲劇の主人公であつた丁度加持力教の修道院の尼僧が夜更で唯獨り禮拜堂に入つて主に祈りを捧ぐる時その薄闇の堂内に瞬く蠟燭の灯の灰明りに照された基督の塑像を拜して思はずも夫れに抱きつきハツと我に反つて泣く事があると云ふ吾々は他人の罪業を傍觀して居る時は如何に惑亂しても餘裕があるがそれが自己の實際となつた時に眞の罪業に觸れる罪の人でなくては眞の宗教家ではない吾々は彼の教團の人々等の具體的生活を心理的に描寫するには矢張り創作の境地に入つて藝術品に再現するより道が無い、元來佛陀は世相の實狀として女性に一般並に特別の惡德を見これを叱責し呵拆せざるのみか反つてその特性に依り捨惡就善の勸誡を盡したのであつた勿論華色比丘尼も其の一人である。

合掌には華色比丘尼の生前譚や出家の動機目連尊者誘惑說佛道修證等を可成明細に記されてある彼は南天竺得叉尸羅の生れにて後には波羅捺に住し

た其の間には恐しい戀の葛藤や倫落の生活が間斷なくあつた出家してからは蓮華色比丘尼又は華色比丘尼又ハ溫益羅薊尼、鬱波羅比丘尼とも云ふた宗祖聖人は之に對して單に達多惡逆の對象人物としてのみ數箇所^ニに仰せられてある開目抄「華色比丘尼ハ提婆ニガイセラレ」十二、三七法華題目抄「阿羅漢折殺華色比丘尼」十、七立世安國論「提婆達多之殺^{セン}蓮華色比丘尼」七、一四文

摩訶摩耶經下云「時提婆達多見阿闍世王不許前已心大苦惱舉手拍頭切齒罵罵時鬱波羅比丘尼從王宮出而於門外見提婆達多即呵之言汝令釋種不得熾盛於佛法中作大留礙時提婆達多聞此語已極大忿恚即以手拳而打其頭彼比丘尼尋便命終提婆達多又害羅漢比丘尼」文阿闍世王佛陀に歸依する様になり提婆の宮庭に入るを禁じたり時に偶々蓮華色の居合せて哥したる爲めなり。

經律異相^{二十}「佛耆闍崛山ニ在シ時蓮華媛女自ラ善心ヲ生シ比丘尼トナリ佛ニ到ル途ニ流泉ニ飲シソノ面像妍麗無比ナルヲ見テ形ヲ毀ツノ未早ク私情

ヲ快クシテ後出家スルモ遅カラジト爲シテ還リ家ニ向フ佛ソノ道果ヲ得ベキヲ鑒知シ一ノ容姿絶世ノ女人ヲ化作シ共ニ城ニ復ル化人途ニ蓮華ノ膝ヲ枕ニシテ睡臥ス忽焉トシテ命終シ臙臙臭爛シ腹潰工蟲出テ遂ニ肌體解散ス蓮華見テ驚怖シ佛所ニ到リ自ラ之ヲ白ス佛爲ニ法ヲ説キ阿羅漢ヲ得セシム」文合掌所引の法句經註には出家後半月にて四真諦を證し或る夜布蔭堂に入り燈火を見てそれを縁境として火遍處を修し阿羅漢果を證せりと

西域記卷四「佛初利天ヨリ下降シ玉フ時蓮華色比丘尼化シテ轉輪王トナリ七寶導縱シ四兵警衛シ佛所ニ至リテ比丘尼ニ復シ初メテ世尊ヲ見タルヲ悦フ佛告テ曰ク汝ハ初見ニ非ズ須菩提既ニ慧眠ヲ以テ我ヲ見ルト」文佛陀の双神變は外道降伏の爲であつた。

大智度論一四十三「華色比丘尼呵之復以拳打尼尼即時眼出而死」(文明三逆罪下)

谷響統四初「經律異相ノ蓮華色尼發心得道ノ緣等

ヲ出セル事アリ提婆所殺ノ蓮華色ト同異未詳又佛初利天ヨリ降り玉フ時轉輪王ト化シテ最前ニ佛ヲ拌セシ華色比丘尼モコレト同異測リカタシ經律異相ニハ又別に華蓮姪女ノ事ヲ出セリ」云云外に記八本五三輔正記八二十涅槃會疏三十一等ニ出ヅ

美しい名の蓮華比丘尼は恐ろしい達多の爲に悲慘の死を遂げた考へると當時の教團の人々と吾等の間には切つても切れぬ人間性の結ばれて居る事が悟られる女性の世界を男子のその如くに展開せんとするときは優秀なる創造力に俟たねばならぬ若し此等婦人の事蹟を明かにするを得ば佛教史上婦人の如何に活動せしかを知るを得るものなるを以て之を記して後鑒を待つのみ成りしものは皆滅す不逸放に勤修せよ。

聖き涙

秦觀行

諸法實相鈔曰く現在の大難を思ひつゝくるにも涙、未來の成佛を思ふて喜ぶにも涙せきあえず、

鳥と蟲とはなげども涙落す、日蓮はなかねども涙ひまなし世間の事にはあらず唯偏に法華經の故也若しからば甘露の涙とも云ひつべし。

涙と云ふものは其の人の眞情發露の結果であるから概して神聖で、なんとなく其の人の美しい情が偲ばれるものである、私共が心に非常に嬉しいとか、または非帝に悲しみを感じた時には、其の悲嬉の程度は、語葉や身体では現はすことが出来ない此の時に當て一滴の涙は、良く其の情を表してくれるものである。然らば、聖祖は「うれしきにも涙、かなしきにも涙、涙は善惡に通ずるものなり」と言はれてゐる。私共の生涯の中には、自分の周囲の事狀からして随分潜々と泣くこともあらうが、多くは自己が其の中心概念となつてゐるやうである、甚しいのに至つては、それ程悲しく感ぜなくても、多くの人が泣いてゐるから、自分丈平氣な顔もして居られず、世の所謂「おつきあいに泣く」といふ連中があるが、此等は全く穢れた涙、涙を惡用したものと云ふべきである。

未來の成佛を思ふて泣き、一切衆生の浮沈を慮りて泣く其の涙は實に神聖な、無垢な美しい涙である、古來から、偉人英雄が、其の國を思ひ、其の民を思ふて感慨無量、靜夜、拱手、天の一角を睨むで悲しむ、其の一滴の涙は千萬の意味と無量の價值とがある。

嗚呼本化大聖は、かうした涙に幾度咽ばれたであらうか、波荒き姐岩に佇み玉いては、澎湃たる大洋を眺めて、我等の成佛に就て慨き、朔北風寒き塚原の野に流されては、法華經の爲に悲しみ玉はれたのである。

生活難、就職難、或は俗事の悲痛暗愁に就ては誰れも直接間接の關係からして慨きもし、悲しみもするが、誰か妙典の流布を思ひ衆生の成不を思ふて慨いた人があらうか、私共少くとも宗教家の立場としては、生活といふ様なことは第二義の問題である、現代の多くの僧侶が、此の第二義の問題に就てのみ、煩悶して、更に頭を衆生といふ方に向けなくなつて、淺間しひ穢れた涙に親むで、

聖き本化の涙に疎くなつたのは慨くべきである、宗教家の天職を忘れた大罪人である。

崇拜し奉る本化大聖の御一代は永へに此の迷雲を開拓して誤まれる、宗教家の手本である。

聖き涙、私共は此の尊い、聖い、意義ある涙に咽ぶやうであつて欲しい、そして一日も此の聖い涙が、王法と佛法と冥合し四海妙典に同歸して、遠くば本佛の御素懷、近くば本化大聖の大志が現實されて、上下萬民隨喜の涙となるやうにしたい。聖き涙の底には魔するやうな大なる力がある。

聖誕七百年に際して 世人に訴ふ

高 瀬 教 闡

凡そ此の天地間に介在せる、ありとあらゆる生物には、病無き能はず、況して四百四病の器とも云はれて居る我我人間の身の上に就ては、言を待たざる所なれば、此の集團によりて構成されたる

國家なるもの、又病無きを得ず。我々人間の病に就き考へ見んも、其病質によつて、普通一般の所謂病と稱するものと傳染性を有する病とに別れ、此の二者を比較し其病質の何れが恐ろしく何れが害毒の甚大なるかは云はずもがなにて、コレラ、ペスト、肺結核等の如き傳染病は他の病氣に比して如何に危険たるかは論を待たず、彼の病菌に一度襲はれんか終に致命傷たるを免がれず。胃腸心臓等の如き病も共に恐るべきは相違なきも其異なる點や、その人一人に止まれど、傳染病たるや、唯單に一個人を倒すに止まらず猛烈なる勢を以て四方に傳播し、其害たるや、實に戰慄すべきこと、流行性感冒の爲めに倒れたる數、前後五箇年間に亘る世界の大動亂に於ける戦死者（七百萬人と稱せらる）のそれよりも、僅かの短日月に於ける惡性流行感冒による死亡者の多きを算せしは、既に世人の知る所にして、殊に外國の或市の如き其人口の一割に及ばんとの慘憺たるに到つては、戰慄せざるを得ず。故に誰人も傳染病患者と云ふを

知らば、各自に於ても要心し、國家に於ても豫防の方法を講じ、患者の隔離や衛生部警察署等俄かに大活動を始め、新聞は盛んに大書して國民に警告をなすなり。

さて國家の病にも亦自ら此の二種あるを記憶せざるべからず、我々日本國民たる者、自己の身体の大切なるを知ると同時に我國体の何たるかを忘るべからず。我々一身の血潮の中には、我々祖先幾十代の血潮が流れ、一個の身体は父母に依り、父母は祖父母によりて生れ、斯くして祖先傳來の血潮は過去現在未來と三世に通ふものなれば、我國は天照太神國を肇め給ひてより茲に數千年、所謂教育勅語の「我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠」にして、天照太神正に我國を創建し給ふに際し、天壤無窮の詔勅を下し給ひ、畏れ多くも皇室を大家に戴く此の大家族を成し、祖先には玉なす御手に劍を執り、三韓を膺懲し給へる神功皇后あり日の出づる天子日の没する天子に致すと、我國の威光を示されたる聖德太子あり、又彼の歐亞大陸

に跨がる大國を指して小蒙古と呼び、閭浮統一の偉大を高唱し給へる日蓮聖人あり。此の永遠無窮にして神聖なる國家に住し、光榮ある祖先を有する日本國民よ、總てを西洋の新奇に附和雷同し、我が國体も歴史も顧みず世界の大勢をも洞察せず唯盲目的に新説を鼓吹するを以て新らしがり、本邦固有の美德を陳腐として嘲けるが如き、國家社會に害毒を流し、遂には天下を殺し國基を危くする險惡の氣分あるを對岸の火と思ふ勿れ。今や世界各國を其毒牙に倒さんとする恐るべき傳染病の既に露國を倒し、早くも東洋の天地を赤化せしめんとしつゝあり。斯る精神的傳染病流行の根元たるや、那邊に存するかは詳かに知る所にあらずとも、そが戦後に於ける時代思潮の大なる影響をなす所たるは言ふまでもなく、而して其感染せんとするは、心身に大なる缺陷あるにあらざるや、曰くそは近來都會人士中、特に社會的地位を有する智識階級者の腦中には、所謂我儘勝手のデモクラシーなる思想浸み込み、恰かも元品の無明となり

それより生ずる所有、非國民的行動に諸方面に波動を及ぼし、之を癒すに良醫無きを如何すべき。

利己の見解の元に大和民族の先天的精神を没却し輕佻浮薄賣名射利の軍、前後左右を顧みず横行を極め、脅迫威嚇の態度に出で、群集を頼みて同盟罷業、サボダージュ、示威運動等の、世界的に荒れ廻る流行は遂に各地に其猖獗を見るに到り、人心をして洶々たらしむる忌はしき思想の傳播と共に國體觀念の廢頽せる所以のものは我國教育の罪ならんも、又國民が宗教の撰擇を過つに基因す。嘗ては明治時代に於て、胸中に社會主義を懷ける傳來思想の炎は、反逆事件の行爲の煙と立ち登れり誠に思想は行爲の母なり、瞋むべきは行爲にして恐るべきは内に潜める危險思想なり。

我國の現代思潮を觀するに、黒船の渡來により世界に覺醒せる、過去五七十年の故國の過程は、云ふまでもなく燦然たる物質文明の旺盛を示したるだけ、精神的の社會政策に認むる缺陷を指適さるべきは否む能はず、徒らに世界思潮の蠢動して

理論と實際とを混同無差別して、社會道義を破り金甌無缺の國體に危害を加へむとするマルクスの社會觀念に心酔し、虛無思想の實行を期せんとするクロボトキンの社會革命に雷同し、依つて毛唐が鶏肉の血を嚥らんとするが如きは嘆すべきに非ずや。彼等基督教徒は博愛を口にして人種差別の排日を煽動し、神はゴットあるのみと叫び、己が客分の身をも顧みず其國に居て而も大君を呼ぶに猶ほ罪の子とは何事ぞ、國民尊崇の神靈を無視し我國の美德たる祖先崇拜は野蠻宗教なりとは何のたわけぞ、如何に科學萬能を以て生命とする彼等なりとも、我國體を無視し宗教に事よせて危險思想を教養せしむるは、國家の傳統を紊し、國家の組織を攪亂する惡魔にして、國民の福利、國家の靜謐、社會の秩序を振盪して顧みぬ如きは、斷じて許容すべきに非ず。

宗教により國も榮へ又宗教によりて國も亡ぶ、「日蓮によりて日本國の有無はあるべし」と、天上下下介然孤立の身を以て滿天下の僧俗を敵とし

て折伏の法鼓を鼓らし、本化上行の化身と自覺したる信念は、如何なる迫害にも忍辱し、眞理の追及と國家の意志希求の立正安國の下には、秋霜烈日峻嚴一步も苛責せず、閻浮一統の天業を建説すべく「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」と國家開眼に點睛し、小蒙古御書には「此度蒙古軍の征め寄するとも、日蓮が弟子檀那にして果の意志に逆りてまで助言だにするものあらば、師檀の契りを斷つべし」との意味を以て滿天下に囁ける志向の高邁と「孝子慈父の王敵となれば父を捨て、王に參るは孝の至りなり」と、人の子に順逆正理の大義を訓諭して、悔みざる國家奉仕は、不退轉法輪の權化として、三世に通ずる社稷眞人の典型を示し給ふ。實に今より七百年の昔、日本國が生み出したる聖日蓮は、クリストが如き博愛正義の立脚地を認容せるに非ず、マホメットの如き武斷壓制を以て宗教價値に試金したるに非ず、孔夫子の首唱したる治家修身の現實教を以て治國平天下を宣傳

したるにも非ず、況んやルーテルや野鷲の機界的二段三段の人物に比するが如きは不倫にして、本化上行の再來たる聖人は、三身具足の本佛にあらざれば「爾前迹門の釋尊なりとも物の數ならず」と蹴散らし「日蓮が門下は臆病にては叶ふべからず」と叱咤し、本地攝伏の一大旗幟を翻へして、「漢土月氏にも勝れ八萬の國にも超えたる國ぞかし、本門の戒壇此の國に建つべし」と、建國以來の道の國、神の國たる佛國土に住し、久遠の生命を有する此の國を基礎とし、五五百歳の長き闇を照らすべく、一天四海皆歸妙法の法華經弘通に、「日本乃至一閻浮提一同に本尊とすべし」と宣傳し、破邪顯正治國安民の實現を舉げん爲め、不惜身命獅子吼遊ばされたる、世界的不出世の巨人にして、宗教にも徳教にも、一切人事の規範に超越高踏し給ふ、偉大なる靈格者なり。故に一日蓮は何れの宗の元祖にもあらず」と。

嗟!!斯かる偉傑日蓮の降誕七百年に際したる我等國民は、維新に覺醒せる明治世代の唯物文明の

典型に對し、大正維新の所謂改造期に當り心得ふべき事は、彼の過激、無政府、共產主義の如きは、世の不逞不平不滿の洛伍者の説に外ならずして、如何に巧妙なる理窟を附會するも、到底正しき國家社會に許容すべきに非ず、幾千萬世を経るとも斯かる主義主張は正法の國に實行さるべきに非ず。こは亂世の餘波たる強盜山賊の類にして、唯百鬼夜行の醜態慘狀を演じ、人類をして不幸に陥らしむに過ぎざるのみ。されば世界文化の偉業に貢獻すべく、我れの進んで爲すべきは、猛火の勢を以て風靡せんとする過激なる傳染病の退治にあり。こは正しく是好良藥の法華經の色讀日蓮が「根本の信」を以て、不惜身命の決定心に住し「二陣三陣」の旗頭の下に、末法萬年廣宣流布の實現を期すべきは正に此の時にあり、皇國の爲め大君の爲め義勇以て公に奉すべき亦此の時なり。日本國民として久遠の生命ある國家に生れたるを喜ぶと共に、現代思想界の煽動的動遙に對し、我等が意志を教示し給ふ「日蓮先驅けしたり和殿原二陣三陣

續け」との、御聖訓に添へ奉るの覺悟を以て、日蓮が一門は精神的生誕の赤誠を披瀝して、聖誕七百年の千載一遇の好機をとらへ紀念するはさることながら、本朝唯一無二の偉大なる人格と、崇高なる國家觀念の教訓に見て、社稷報恩に奉答するは、蓋し亦國家使徒の本然なり。然かも大正十年は、精神冥々の裡に相通する日本佛教の開祖、法華經宣傳の大恩人、國家主義の鼓吹者たりし、聖德太子の一千三百年と、傳教大師千百年の忌辰なるのみならず、更に教主釋尊の御降誕二千九百五十年の嘉辰に迎遇する、我等が紀念を新にすべき多幸の年なるに於てをや。(大正十年正月十五日稿)

奉迎七百年聖誕

結 城 瑞 光

戰後の世界は政治教育或は藝術宗教の各方面に混沌たる思潮充滿して人心の動搖、世界の趨勢は小天地に跼蹐して人類の安寧を防ぐ、吾人等は如是邪想に對して飽く迄制肘し實際的、價値的方面

より社會救済に正適せる根本思想を欲求して止まざる也。

明治初代に於ける時勢の推移は宇内の大勢を洞察せる憂國の志士によりて數百年來の專横なる武家政治を倒壊し、因循腐臭を一新して外來の文明を模倣するに急なりしなり、舊來の學問信仰は容赦なく驅逐され、物質文明の潮流は剛直篤實なる人心に侵透して、輕佻浮薄なる虛飾的風潮一世を蓋ひ、佛教も排佛毀釋の非運に遭遇し輕便主義の宗教は茲に勢力を得るに至れり、雖然盤根錯節に依りて利器の別を知るの古語あり、佛陀は三千年の往昔に於て己に此の時代を達見して白法隱沒の時とは云えり、孟子も憂患に生じて安樂に死す道破せられたり、却て人間は刺戟に依りて自覺する者多く縱令苦境に没落すとも自己を反省し向上の力を有すれば失望すべきに非ず、滔々たる物質文明の不健全なる生活を持續して自己の天職を自覺せず、徒に外部よりの壓迫に恐怖しては前途甚だ寒心に堪へざるなり、現今社會の表面上は物質

文明に於て正整せし如き觀ありとするも内面的生活は却て後退し人心の不安は漸々加はり慰安を求むる救の聲は人心の奥底より叫ばれつゝある也、此の時健全なる信仰を鼓吹する先覺者ありとせんか、吾人の凝視果して何處ぞや、諸君よ聽け自ら何れの宗の元祖にも非ず又未葉にも非ずと公平なる立脚を闡明し混濁なる世界人類を救済せんとして現れし眞の聖者日蓮上人を紹介せんとす。

前には茫々果てし無き大洋の紺碧を控え、後には滴ん幽邃の青緑を負ひ、仰げば千古變らぬ悠々の蒼穹此處日本國の東南隅房州小港の地は聖日蓮を生める淨地なり、時は之れ人皇八十五代後堀川帝貞應元年壬午二月十六日、曉天十丈の朱輪は常闇の夜を破つて大洋を離れ黄金の箭は虚空に射られる頃なりしなり、慈父は藤原鎌足公の末孫貫名重忠悲母は大野吉清の女梅菊御前にして幼名を善日麿と命名せり、天稟の英戈は双葉より香しく十二歳にして當國の名刹清澄寺に登りて得度す、驚

馬を繋ぐ羈絆は永く天馬の足を繋ぐ能はず、非凡なる天資を有する聖人は當時の佛教の分裂して各々自己の宗派に偏執し其の覇を稱えて終ひに歸趣する所を知らざるを遺憾とし佛教を統一的に見る時は條然として一貫せる根本的佛意の存するを推考し之を研めんとして即ち佛天に日本第一の智者となし給へと祈誓を凝らし拾七歳決然鄉關を辭して鎌倉或は叡山南都に遊學し止暇斷眠奮闘の十六年間の星霜は研究時代にして、其の學問の該博は獨り佛教に止まらず、汎く和漢の學に亘れり、勿論一宗一派に固著し自己の勢力を扶殖せんなどの非英雄的行爲は毫も無かりき、惟だ眞理を求めん爲に嚴正なる態度を以て公平に研究の歩を進められたる也、建長五年四月廿八日修業せる聖人は故郷清澄の一角に佇立して、金色の光渺茫たる蒼海に映せんとす瞬間、紺青の天空に轟く一呼百諾の題目は旭日に對つて高唱せられたるなり、春風秋雨三十年嚴訓慈愛の發動は剛となり柔となり生涯を一貫して佛識立證に即して迫害襲來の必然的運命

を甘受せるなり、洗華經の眞生命を開拓して佛教の正邪を開闡し眞理の所在を明白にし教理上の大義を提唱して國家諫曉人心の趣歸を圖りし、其處に聖日蓮の自覺的改革の躍々たる人格を透見し得べし、所謂威嚇も權勢も日蓮聖人の正義の主張と偽らざる告白の慈悲の血涙に墊塞しぬ、

日蓮を誤解せる人士は「狂熱は金石をも熔かさずば措かざる也、彼を信する者は己先づ其の狂熱の中に溶けて自己の理解の餘地を失ひ身延入山は彼の一大懺悔なり」と云ふ考察を爲す者あり、且つては柳營鎌倉の街頭に侃々諤々の辨を揮つて一世を警覺せる當年の法華經の行者が、隱遁的生活を九ヶ年間繼續せし事は頗る矛盾の感ありとするも延山以前の活動は多く對外的にして之れ創業時代の特色也寧ろ當然の理と云ふべく、入山以後は内部の訓練の力を致し一は嚴肅なる滅罪生活と美しき報恩生活にして、一は將來に於ける群生救済の重大責務を任すべき子弟の教養の爲め頽齡の身を顧みず晩年の意氣を傾倒せられたる也、如是聖人

の艱苦にも屈せざる救世的觀念の大勇猛心は死すとも猶止まざる衝天の意氣ありと雖ども、一面に於ては一輪の野菊に對して無常を歎げく纖細デリケートの情調あり、剛毅の反面は極めて謙讓なる人格者にして深く自ら責め自ら抑えて許す所無かりし偉大なる聖人なりき、聖人を知らざる淺薄なる人士は得て皮相的見解を下すもの也、

弘安五年十月十三日臨滅度時の鐘の音は韻々として寂莫に響き香煙薰郁たる辰の刻に慈顏笑を含みて法体眠るが如く不滅の靈光衆生の闇を照し、深き涅槃の雲に隠れ給へり、寶算六十一歳、血と涙とによりて色彩られし生涯は清く而して深刻なる感銘を残せる歴史の一頁なりき、大正の現今天下の民衆は何れも肉餓へ心渴きて靈の麵包と滾々として涸かざる生命の泉を冀望して止まざる也、宗教の改革生活の根本的改造は既に吾人の頭上に接近せり……聖誕茲に七百年大蒙古の襲來無しと雖も思想の變遷惡流の來寇或は排日など現代の疾患は吾人等を痛戟して、見ぬ蒙古以上の慘劇を見

る噫！是等の疾患を克服し永へに人類の光明たるべき當年の法華經の行者今何處に居る、日蓮聖人を研究し理解する人物は已に聖人を知る者にして現代を超越せる法華經の行者也と謂ふべきなり。

自覺せよ青年僧侶

戸田 峰仙

本年は聖誕七百歳にて吾が門下は津々浦々に至る迄至誠を以つて奉祝す。吾人は日蓮大聖人を口にする時常に自覺の二字を思ひ浮べざるを得ないのである。

「人生字を知るは由來憂患の初め」と云ふは、何を語れるか、所謂自覺の意味に外ならぬと思ふ。世に處して空々寂々たる者は、無事太平あらんも稍々理解力成すれば則ち種々の憂生じ來る。詰り道を學び自覺力の生ずるに従つて色々な煩悶の起るものである。例へば一般に田舎の人は質朴にして別に野心も希望も無き様に見ゆれ共晨に星を戴き、夕に月を踏みて、終日糞土の間に勞役し、而

も何等の不平なく平和な生涯を送り。都會の人は奢侈なる生活に流れ、巨萬の富を夢みつ、劇甚なる競争場裡に心身を勞し、而も年中生活難に追はれ、甚だしきは其れが爲に生命を棄つるが如き悲惨事もある。

或は學問を以て人生を解結せんと欲し、不可解を絶叫して遂に華嚴の瀧に身を投ずるが如き者さへ少からず。是に於て、田舎生活と都會生活とを對比するに何れが幸福ならんか。

諺に曰ふ「瓦となつて全からんよりは玉となつて碎けん」と一見田舎生活は平和にして吞氣ならんも都會の生活難てふ動物に喰はれんが爲めに、都會生活を營まんとする者、年々増加し來る、之れ所謂瓦の満足に甘んずるを得ずして玉となつて碎くるを望むの輩なり。所謂尙其の言は自覺的の意味より來らざる可らず。

然るに近來此の自覺と云ふ事を頻りに主張する者あり雖然此の自覺とは如何なる意味ぞ過去より現在、現在より未來益々必要なる事は云ふ迄もな

き事なり。又人間の心理狀態として、何人にせよ必ず起るべきもので、智識が進めば進む程、自覺を生ずる者である。此の自覺の境地に立つたと云へる人は必ず理想と抱負とがなければならぬ。若し自覺せりと雖も理想なく抱負なく自ら任ずる所なくんば、決して眞の自覺とは云ふ可らず。自ら任ずる所ありて、理想に向て進む場合果して如何なる經路をたどるかと云ふに、社會の事は容易に意志の命する儘にならず、自己の高き理想は社會に認められず、實際には様々な障礙を生じ、容易に之れが實現を見る能はず。是に於て苟も自覺を有し、理想あり抱負ある人々は、事實上必ず不平が起る。「物平かならざれば必ず鳴る」で。極く平和で満足の位置にあれば何等の苦痛も不平も起らざるも、現在の境遇に満足せず、何等か前途に光明を認め、理想を立て、之れに進まんとするものは、絶へず平かなるを得ずして、常に波瀾を生じ煩悶不平と戦はざる可らず。此の意より云ふ時は不平煩悶は實に人生の美點と云はざるべからず。

古來聖賢偉人と謂はるる人々は皆不平煩悶の人々である。釋尊にせよ、基督にせよ、吾祖大聖人にせよ、何れも現在の自己の境遇に満足する能はずして、大なる理想抱負を有し、大なる不平を充さんが爲めに、渾身の力を竭し、彼の偉大なる人格を致されたのである。既に理想に不平を伴ふ者せば、大なる理想には大なる不平の生ずるは勿論なり。基督曰く「我は神の子なり」と。併し事實彼は許嫁の夫より排斥された宿なし女の腹より汚き馬小屋の藁の上に産み出された憐れな兒である其れが自ら神の子なりと叫びしは實に自覺の二字によるのである。釋尊は一國の王子として御降誕遊ばさる。通常の人なれば實に満足す可き境遇なるに、釋尊は物質的慾望の満足を求めず大なる煩悶を生じ、大なる不平を起し、遂に出家し千難萬苦を敢てして、自ら悟る所あつて「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」亦た「我亦爲世父乃至每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」と。此の大抱負を以て、一切の衆生を救済せんとせし

釋尊の理想抱負は豈に小なりと云ふ可きや。又日蓮大聖人は十有餘歳にして既に自己絶大の天職を自覺し、天下國家否、三千界の絶對有爲の學に志し遂には「我れ日本國の柱とならん、我れ日本國の眼目とならん、我れ日本國の大船とならん等と誓ひし願破る可らず」と。又我國のみならず、世界統一の眞佛教を開顯し唱導せる「一閻浮提第一の聖人、智人」として任じられし事は撰時鈔、開目鈔等に於て明なり。斯の如き、大理想を以て、亂れに亂れたる、彼の鎌倉時代に處し、天下を救済せんとの大抱負の下に、生涯を流罪死罪等多數の大難に遭遇せらる。斯の如く大偉人大聖人と云はる、人々は、必ず大なる煩悶大なる不平の人々である。併し一般世俗の淺見を以てせば所謂釋迦は一生涯一衣一鉢の乞食、基督は十字架上の罪人、宗祖は五尺に足らざる身一つ置き所なき流浪の人にして成功者とは云ふ可らず。然れど超世間的の靈界より見れば、釋迦は世尊、三界の大導師、基督は自ら神の子なりと任じ。宗祖は一閻浮提第一

虹影の凝視

岡 観 修

の聖人と叫ばれしは、何れも絶大の抱負と確たる根據に立脚し安心立命を如實に行へる大偉人である。然るに現今の社會狀態を達見するに思想界の惑亂物質界の恐怖何等確固の根據もなく堅忍不拔の自覺信念もなし。

吾人は佛教界の一人として國民の無自覺を悲まざるを得ず。第二の國家を荷ひ立つ可き吾々青年僧侶は、須らく自身を知り、自己の人格を尊重し

自己の自己に非ずして、國家の一國民であり、社會の一員であり、家族の一人であり、我が一言一行、直に一家族、一社會、一國家に影響を有する、大なる自己なるを自覺せねばならぬ。所謂自己は單なる自己に非ずして、一言一行微細なる行爲も盡く大なりとせば確然たる自覺と、大なる理想抱負とを以て重大なる天職を完うせん事を希望して止まざるなり。終り。

此の虹影の凝視は大正九年十一月十三日大崎日蓮宗大學中等部主催都下中學校雄辯大會に出演せる原稿である

高山幽邃の間に、湯々たる聲を上げ、瀑々たる音を立てて九天の空より落つる奔瀧の、其の沫から現れた虹影は、人間不斷の、努力の影で有ります。

父秩の連山を背景とせる、代々木ヶ原に鎮座左す、明治大帝の英靈は、我等七千萬同胞の動脈に通ふて、吾人不斷の力となり。建國の大本を物語つて居るので有る。

惟ふに、金錢、名譽地位もて、人間の價値は、評價し得べきものでは、有りません。世界第一のリッチマンで有る、カーネギーも、遂に彼の生命を、永遠に購求する、黄金は有たなかつたので有る。彼の、慘虐極まれるルイ十四世の不倫の名譽は、遂に我々を指導し感化すべき、滅せざる名

譽では無かつたので有る。

年々歳々花相似たり、年々歳々人相同じからず、紅顔の年少何時しか額には青海の波を漂はせ、腰にはあづさの弓を張る、人事の悲哀は朝露の消ゆるが如く、心有る者の等しく、悚慄する所で有る如何にせば、是の如き、大苦痛より脱する事が出来るのであらうか。……天地自然の運行は、吾等を現實より容赦なく、測し去るので有る。發測たる生氣も、何時しか消え失せて、ひたすら、厭世のみが、心中を往來するのである。!! 噓か、る人々が増えたならば、結局世界は、如何になるので有るか。粟粒の様な此の日本國は、忽にして、壊滅の止むなきに到るで有らふ。世界の前途も亦知るべきで有る。……然し而し、詩人は詩人カーライルの言葉を、聞かねばなりません。

自然を深く掘れよ、掘つた底には無限の音楽が囁いて居る。今吾等の、此の小我を捨て、大我に没入するの時、恰も宇宙本然の囁きに共鳴して、天然法爾の一大生命を、得るので有る。

と、所謂大なる自然の流れに一如して、有限なる人生に不朽なる生命の躍動を、見出すので有ります。ダンテの戯曲、ミケランジェにの彫刻、皆是れ自然の流に外ならないので有る、即ち彼等は、大我に合致して、審美の靈光に浴し、無限の生命を、戯曲し、彫刻した人々で有ります。

瑞雲綬繾たる大内山の一角に武裝せる楠公の銅像は抑も、我等に何を物語つて居るので有るか。將又香煙縷々として、斷えざる、高輪泉岳寺の地下に安らげく眠れる四十七士は、抑も我等に、何を物語つて居るので有らふか。國賊を拂ふ鎧の袂しぐれ涙燥かぬ南朝の忠臣、楠公の盡忠は、我等の肉となり骨となつて居るのでは有りませんか、彼等は自分自身を徹底的に、透見したもので有ります。

さすれば我等人間は、自分自身の價值を、徹底的に知らなかつたならば、已に朽ちたる、埋木の如きもので有る。自然は人生の破滅であり、窮極であり、而も亦人生をして、神聖にし高尚にし且つ意義あらしむるもので有る、偉大なる哉自然のク

ラフト……自然を抱擁し懷從して、永遠の生命を獲たとて、光と力が無つたならば、濁々と流れて止まぬ、川水で有ります。崇高なる人格者には、光と力を、自然が捧げるものである、崇高なる人格者たらんには、崇高なる人格者に、同化せざる可からず。所謂感性より悟性へ、不純より純へ、不信より信へ、入つた時に、始めて獲得する事が出来る、唯一絶待の、人格で有る。此の正しき信を得るならば、其處に絶大の感化力を得、其の体宇宙に遍く、其の徳宇宙に充ち生無く滅なく、常住永遠の生命を、見出す事が、出来るので有ります此の偉大なる人格者は抑も誰ぞや、奔濤激流岩を嚙んで、流る、富士川の水な上、此處身延栖神の靈碕に在す、日蓮大聖人其の人で有ります。

日蓮上人曰く、「日本國の有無は日蓮に依りて定まるなり」と、大獅子吼せられたる、大抱負と大慈悲とは、有史以來未だ且つて、有らざる事で有ります。

富士川の水が流れて、大平洋となり、大平洋の

海の水はロンドン、ティムス河の水に、接觸して
いる限り、日蓮の靈光、否な日蓮上人不朽の生命
は、世界人類の血液と流れ、萬有の上に、恩寵と、
光榮とを、並與して止まぬものと、信するので有
る。

萬場の諸君!!我等には、崇高なる人格者と、爲
り得らる、素質が有ります。乞願くば、緊禪一番
國の爲め、人類の爲に、靈界の偉人、日蓮大聖人
を知り給へ。

以 上

學問の軌範

高 山 惠 忍

世の中に學問はど有益な且遠大なものはない。
座して宇宙萬物の真相を知り千萬年後に生れて千
萬年の前を如り又千萬年後をも推究することが出
来る、これ皆學問の徳である、故に吾々が世に處し
て行くに是非ともなくてはならぬものである、世

の學問する人を見るに其天職に依つて種々目的は異なつてゐるが吾々宗教家殊に日蓮門下の立場よりすれば言ふまでもなく國家人類を救はん爲に學問してゐるのである、さすれば吾々の學問は犠牲的であり、献身的であつて其間毫も私慾の念慮を挿むことを許さぬのである自分は衆生を度すべき僧の身なれば他の幸福を増す爲には自分の犠牲を忍ばねばならぬ。七百年の昔日蓮大上人は御一代を通じての忍難生活に依つて垂示せられたのである、其の末流を汲む吾々は犠牲的、献身的精神を以て勉學の軌範とするのは必然的要項である吾々が其意を体しこの決心のもとに成學したなら、それは光輝ある學問となつて世を益すること甚大であらう、此種の學者は眞に國家の寶として敬虔の念を以て優遇されるであらう、然るに事實はこれに反し一度其成果の微弱なるを見て余は駭驚せざるを得ない。

余は茲に於て從來學徒の誤り來りし一大缺陷を認めざるを得ない、一大缺陷とは何んであるか即

ち「信」の一字である、吾々が學問するのは智慧を得んが爲である眞の智慧は眞の信仰に依つて始めて發生するものである、聖祖は「諸佛の智慧を買ふは信の一字なり」又は「行學は信より起る」と教へられてある即ち智慧の根底となるものが信仰そのものである古語に所謂桃の秦々たる葉を生じ灼々たる花を開き實々たる實を結ぶとあるのは唯この根養あるが爲である、智慧の働きはその花である、智慧の作用に依つて結果したる所は其實である、さすれば眞の智慧は眞の信仰の根養に俟たねば到底開發することが出来ない信なくたい學のみ勝れたるは一個の單調な物知りとして見るべく到底宗教家の價值を有せぬものである、宗教家たるものは須らく深刻なる信仰より發する所の大智を以て宇宙に存在する萬物を觀察し之れを靈活せしめるだけの徳用を有せねばならぬ、近時文明の發達につれて泰西諸國の宗教が雜然として流傳し恰も蘭菊美を競ふが如くである、この際此の多岐多端の宗教に對つて破邪顯正の利刀を揮ふ吾

々は絶對必然的に深刻なる信仰より發す所の鮮明なる 智を保有せねばならぬ。

なんとなれば信なき淺薄なる智識を以て何んとして幽玄深妙なる宗教の本質を會得し得べしや、況や其除劣得勝おやである、探究に探究を重ねてしかも其一部だも窺ひ知ることを能はずして終に絶望の歎聲をもらすものは何れに基因するか、大に猛省しなければならぬ、吾人は宗教の本質を知らんとして汲々たる無信の學徒に對し木に依つて魚を求むるの言を呈したい、自覺せよ、江湖の學徒眞宗教の究竟を把握し破邪顯正の快腕を味わんとなら須く、圓滿なる智情意に根底する所の深刻なる信仰の獲得に向つて勇猛邁進すること最も急務なりとす、以上の如き信仰を學問の軌範とし成學を遂げんか、其學問は實に貴重な光輝ある活力ある働きとなつて社會を益し人類に幸福を與へること甚大なりと信ず、信仰確立すれば智識の散慢もな、勉學の中途にして遊惰放蕩に墮することもないのである、従つて惡思潮に惑溺することもない

く泰然として東西文明を批判し斷乎として全宗教の歸趨を指示することが出來、始めて眞の宗教家たるの資格を誇るべきであると思ふ吾人は深く思ふ所あつて敢て學徒に此事を勸む。

聖誕の警鐘は鳴る

德 光 泰 良

時は北條氏畏れ多くも三上皇を三處に配流し奉り。皇國の神政を恣にせし吾國開闢以來破天荒の大逆罪を犯し愚民爲めに其據る處に迷ひ夜打、強盜を是れ事とし、加ふるに善神此の國土を去りて天變、地妖、飢饉、疫癘交々來襲し其慘憺たるや實に鮮血滾々として流れて河を成し、死屍累々として積んで山を成し苦痛叫喚實に現世の地獄にあらずして何んぞ噫、是れ畢竟、北條氏の潜越、惡政に據ると雖ども斯く世法の混亂せしは當時の佛法及び僧侶の如何に誤り居りしか、如何に腐敗墮落せしか彼等僧徒の邪教は浮薄なる人心に流れ社

會に害毒を與へし事の甚大なるを追懷せば滿腔の悲憤一時に激發して禁する能はざるなり。嗚呼此の時此の土に大なる使命を帯びて降りし一個の傑僧あり、そも何者なるぞ。知らずや是れ空前絶後の聖人、上行の再誕、法華經の行者、吾人、人類を擧つて南無すべき一大救世主日蓮上人なり矣。本年は其聖誕七百年の嘉辰を迎へたり。オ、生れ難き末法に生を受け、値ひ難き妙法に値ひ奉り而して又々此の聖紀に浴せし吾人等の幸福や如何に、歡涙滴下して思はず合掌せざるを得ざるなり然し乍ら此の聖紀を徒食無爲の裡に過し終るものあらば、そは祖意に稱はざるのみならず己が果報を失し悔みを千載に残すものなり。

見よ、今や社會は暗澹たる惡思潮の浸す所となり萬民、塗炭の苦しきあまり、始めて己が救はるゝ一路の光明を認め愚子の慈母に縋らんとする現狀に目覺めたり、而るに漫然たる我が宗門の僧侶は此の要求に満足せる救濟策を構じて彼れらを充分に救ひ得たりと云ふか否其成果の甚だ微弱なる

を見れば、人思はず切齒扼腕、天を仰ぎ地に伏して心に悶へ身を燒くの思をなす、奮起せよ聖祖門下の青年僧侶よ一天四海皆歸妙法の理想に生きたる吾等第二の宗門建設者よ慈眼視衆生福壽海無量の慈念に住して異体同心の祖訓を奉戴し相提携し相補翼して勇猛精進白刃前を厄くし砲聲後を衝くも神色自若として奮進し斃れて後己まん底の信念を以て弘經宣傳宗祖唯一の御理想たる一天四海皆歸妙法の實を擧ぐるこそ、聖誕の嘉辰に生れ會せし吾等佛子の本領又天業にあらすして何んぞや氏の英氣を把持し正義の爲めには生命を的に水火の難も恐れず此の使命を全うせるもの有りや、悲しむべし其甚だ僅少なるを。他日、全人類をして一齊に改革し世界的活動の花形は那邊に潜めるか第二の日蓮に俟たずんばあるべからず、第二の日蓮、そは吾人等青春燃ゆるが如き本化僧侶にあらすして何ぞ!! あゝうるはしき第二の小日蓮よ祖山の健兒は此の小日蓮の團體なり。數こそ多からざれ萬歲不朽の聖者日蓮の大靈に接し其信念を土臺とし

其誓願に生くる吾人等祖山健兒の小日蓮の力は偉大なり矣世界、何處にか我が敵ありや、二陣三陣續けよとの命令耳朶に響けり宗勢發展の有無は吾人等祖山健兒の雙肩にあり、オ、祖山健兒の任務や重且つ大なりと云ふべし。起てよ祖山の健兒聖誕七百年の警鐘を聞け。雄々しきかな祖山の健兒、聖誕の警鐘は亂打せり。

古きノートの中より

南陽 榮昭

私等が箇人として存在して行く上に、又社會の一人として生活して行く上に、其處に自我の尊崇と自己抑損即ち妥協との矛盾が生じて来る。それも自我的な人間と妥協性に富んだ者にと寄つて、從來其の主張を異にして居た。尊き箇性を飽くまで發揚すべきだと云ふ一派が有れば、或は共同の生活上場合によりては妥協せなければならぬと云ふ。惑はざるを得ない。

惟ふに自我尊崇は折伏主義ではあるまいか、そうして妥協は攝受主義でなければならぬ。宗祖一期の弘法は此の自我の發現に外ならなかつた。圓頂美衣、顔に慈悲の笑を堪へ生如來生阿彌陀と云はれし八宗の高僧然しながら汝に生命有りや、……自己柳損の生ける屍の集ひ。……我こそは眞に生ける東海の熱狂男子！眞に自我に生き得る道は此れと鎌倉の一隅に絶叫せられた宗祖は實に自我の活現体の外に何者であらう。或は怒濤逆卷く日本の荒浪に、或は秋水の大刀の下に、そは尊き自我の發現に報はれたる神聖な迫害だつた。

自我發現と妥協とを更に語を更へて云へば類化と順應とも云へる。偉人は順應と同化と二者共に把つと云ふが、本化の自覺に立てる宗祖は二者の上に超越した或る衝動よりの力であつた。其處に本化自覺の價值が有り、絶對の信仰が力の根元である事を識り得るのだ。攝受も折伏も共に只單一として存在してはならない。同様に妥協も其れ自身であつてはならぬ、必ずや自我發現の爲の妥協

でなければならぬ、純信仰を基礎としての「身は従ひ奉る様なれども心は従ひ奉らず」と云はれし我祖の言は適切に此を云はれたものである。

我祖の信仰を受けつぎ、其の御教に依つて教化せられた門下は皆不惜身命に本化の純信仰の流れを後世に傳へた。此の流れを汲んだ人々は時の專横な爲政者の慘酷なる迫害にも屈せず自我の發現に悲慘な犠牲となつた。先人の紅の血もて彩られた其の流れも、初は妥協も自我の爲のが漸く妥協其れ自身となり遂には尊き自我の生命を打ち捨て、專信順應にのみ心懸くる様になつた。祖の純信仰はいかに？先哲の血もて染めし流れは何處に？こちたき論議を戦はしてまでも攝受と云ふ美名の下に生ける屍を庇護し、妥協本來の意義を失し純信仰をなくした屍を養ひつゝあるのではなからうか

宗教は論議でない。私はいつでも思ふ……宗教に對して其の崇高さを思ふ時、理路に走つた論議や人生觀宗教觀などの説を先づ後廻しにして、只夫れ宗教としての強大なる力に感じ其の大きな總

てに合体して少さい自己の完全を期すべきだ。パイロンが悲曲マンフレンドの中に「如何に我等人間は總ての主權者なりと云ふも一は高き理想に向へる神！他は底き慾望に渴せる塵芥なり。」と云へるが如く半神半獸の我等は迷を去る事は不可能だ。が然し本化の純信仰に立つた場合、其處に同化と順應の二方面を把持し得て、攝折を超越した自我の衝動に依つて信仰の發露、簡性の爲に將社會の爲に、生き得指導し得て本化の大道をとこしへに傳へる事が出来るのだ。……と。

信仰が無い場合、攝受折伏共に單一としての價值はあるも全体としては何等の價值が無い。況や祖の本意は信仰に在せられた。我等は先づ信仰の体現に努め而して後宗祖の末流に加はるべきだ。

過去より現在へ

江 原 亮 勇

私しの過去!!今の靜寂な宗教生活に於いて最も

感激を加へるものである、走馬燈の夫の様に西に東に轉化された私自身の思想、次から次へと流れて行くタイム線上に立つて人生の裏に泣きしたことの幾度あつたが知れぬ、強いて綜合すれば私の過去は思索の人であつた、此は現在の宗教家と云ふ必然的に起つて來る思想の傾向ではなくて過去より現在に流れてゐる思索の連鎖である、私はニイチエの哲學を知らぬ然し彼が享樂主義の主唱者たることを知つてゐる、淺薄な凡俗な私しの頭はハイネの詩を解くに足らぬ然し彼の詩が超物理的だと云ふ事を知つてゐる、印度詩聖タゴールの詩を譯するの頭はなくとも其の優雅な詩調に酔はされる一人であつた、然らば私は詩を作る男であらうか、否々詩趣に生きてゐる詩作の人でない、センチメンタルな私は熱情的な思想家であることだけは知つて居る二十歳に足らぬ私しの過去既に戀あり涙のあつたこと、所謂私しの性格の反面に強激の情炎が燃へて居たことは掩ふべからざる事實であつた、物欲に倦まされた私しは物欲と哲理

の統合!! 衣食と精神の融合!! 斯ふした須難な思想の起つたのが二十歳過ぎての私しの思想状態であつた、軍隊生活に於いて私しの思想を裏切られたことは幾度か知れぬ、又一方紳ひ度いだけ縛びると云ふ青年の自由思想の立場から冷靜に軍隊の批判に力めたこともあつた、劃されて行く日々の軍律に聊か忍從的な殊勝な氣分に成つて眞面目に働いた時もあつた、が然し一般から云ふと社會を忘れ!! 教育を忘れ!! 生來の宗教さへも忘れて忘我的に立ち働いたと云ふのが妥當な感情かも知れぬ、斯ふして軍國に盡して再び宗教生活に還へつた私しの思想状態は、強く誇張!! 美的生活!! と云ふ方面に流動を初めた、結果

「凡てを詩的に!! 美的に!! 解決し想及して若い宗教家と云ふ誇張に照らして行動して行かう」と云ふのが近來の私しの思想の多分子である、將た永遠人生の深刻を望まんとする思想となるかも知れぬ、そうして宗教に思いきり浸潤して全身を任して見たい様な而かも其の信仰のバプテスマか

ら現はれた自然の強力の救であり得たい、換言すれば宗教熱愛と、救ひとの所有者であり得たい、嗚呼誇張何と云ふ美しい味氣ない單純な言葉だらう、只に好奇心から來た威張ると云ふ様な言葉でなくして自身の克己!!反省!!救ひの意義たるべきものである、或女史が「赤き血汐に觸れもせで寥しからずや道を克く人」と云つたのも矢張り誇張の反面たる靜寥を漏したものに過ぎない垂れ籠めて春の行方を知らぬ宮人の悲哀の裡には掬すべき宮人の誇張がある、故に私しの云ふ誇張は總ての物欲の世界から離れた、純白な本性の要求一切の萬難を排して孑然光明な世界に立つた佛の覺りの姿日蓮上人が幾多の過去を背景として旭の森に律然として立ち盡した不動の形其が如來使としての大の誇張ではなからうか、時間に徴し空間に超へた大なる融台であらねばならぬ、斯ふ思つて來た時に私は吾々と光明!!吾々と佛!!靈と肉!!物質と精神!!を想及せざるを得ない、吾々の佛身觀を佛は吾々の内に具すと見るか、佛は吾々の外に超越す

るものであると見るか、即ち、現實主義と理想主義の岐路を見出さずには居られぬ、私は二元論の立場か一元論の立場に徹底しなくちやならない一念三千の妙理と知つて居るし、三身論も若干の理解を持つて居る、當地是處即是道場の思想と考查して見た事もある、吾々は教導者である救世主である以上怎うしても現實より遠ざかる事が出来ない科學や哲學の示す所も一應は傾聴しなくてはならぬ、經驗や努力を尊重視する現代は科學に教示された事も尠なくない、從來の宗教が往々にして未來或は理想主義に傾いたに反して科學は日常の生活の上に非常な權威ある證明を與へた事は又力ありと云はざるを得ない然し科學萬能主義に依つて稍々宗教に近接して來た或方面の識者は茲に宗教心の發端を開覺して居る唯物の世界から唯心の門に入らんとして居る、遠く自己から離れて漸く眞の自己なるものに還つて來ては居るが扨て其自己自身を怪しんで居る、現在自己の有する力に生氣を與へてくれる宗教其者を乏失して居る、斯ふし

た社會を教はんとするならば須く強い人格の光りを以て彼等に接せなければならぬ、自己自身に信仰の洗禮を實踐して其の浸しみの中から出た宗教家としての誇張を以つて凡てを指導すべきではなからうか、私は斯うした思想に悶へ苦策して止まない。

聖誕七百年にちなみて

津 田 春 曉

吾は身延に登りて祖山學院に入學し負笈する事日尙淺く教義にうとし。されど此の短日月間に於て安心立命はいずれにあるかを自覺し得たり、それは即ち本化上行たる末法の大導師宗祖大聖人に信の一字を捧げ奉ると云ふ事なり。

そはそも何故自覺し得たるか、吾が病氣の悲しさが爲か非ず、祈願の爲か非ず、斯かる目前の小利には非ざるなり。宗祖大聖人の一生を推想し感激したるなり。殊に四ヶ度の大難伊東の流罪に溺

れ給はず龍之口に切られ給はず佐渡雪中の苦難にも亦飢へ給はざりし事は暫く措き、實に大聖人の御性格精神の偉大にして形容す可からざるに感ずるなり。偉大なる哉大聖人、劔の下も尙ほ寂光の都彼の伊豆の海の波間に漂ひ給ひ佐渡の國の雪中千鳥の聲に御夢を覺まさせ給ふ御身におはし乍らも「我此土安穩天人常充滿」「天長地久國土安穩」と祈らせ給ふを想ふ時誰か袂を絞らざる常に法華經の大義を唱へ滿天下の衆生を救はんとの大願を起し此の大願の前には「法華經の爲めに此の臭き頭を刎ねられんは砂に黄金を換へ糞に米を代ふるなり」と喝破し眼中權勢もなく威武もなき眞に高天濶地獨立獨歩の大豪傑が人情に厚く恩誼に深く其の情時としては禽獸の末に迄も及びし事は實に感涙に堪へざるなり吾が信の一字を自覺し得たるは此處にあり。此の信の一字を自覺し得實の信仰を捧げばいつしか安心立命の境に立入るを得るなり。

嗚呼太平洋上に洗はる、一島國に大聖人の御誕

生ましましては我帝國は云はずもかな世界全人類に取りて何等の幸ぞや。さらば吾々青年は聖誕七百年を朴し決然として立ち意志を堅固に持ち荒海と一大苦闘を試み聖願たる「一天四海皆歸妙法」の實を擧げられん事を!!

身延の夕暮

高崎 一二

町から山、山から谷、溪から町、霧で一つばいである下の方から馬車の笛の音が淋しく聞えてくる。霧の中からふひに馬車馬の頭が浮かんだかと思ふと又消えて車の響が残つた霧から霧へ人馬が往來してゐる。

身延驛の方から汽笛が立ちこもる霧にしめつて悲しく聞へてくる。

邊りはまるで灰色の海に漬かつて仕舞い土産館のイルミネーションは薄い雲につまれてゐる。

暮合の鐘は淋しく餘韻をひいて峰へくと廻ぐ

つて行く弱々しく吹く風は恰も天女のかなでる微妙の音樂の如く單調な自分の腦中に響いた。

霧は段々と富士川の方に流れて行く、半弦の月は鷹取の山上にかゝり立ちこめる霧の間に間に淡い光を放つてゐる、四顧寂莫たり唱題修行の法鼓の音静けさを破つて聞えてくる手に持つ灯燈に火を點けて淋しい山道を余は歸路についた。

偶感

井無田 壽水

舉世滔滔與道違
風教墜地不知非
頽波砥柱今誰在
天下蒼生安適歸

留學生及び卒業生

前年度泉義敬師が宗學研究の爲め日蓮宗大學に松本本與師が臺學研究の爲天臺宗大學に留學を命

せられついで本年は藤田光肇師が眞宗及び淨土宗
研究の爲め宗教大學に三ヶ年間留學を命ぜられた

り

尙第九回(十年三月)卒業生左の如し

高等部

中等部

荒木經明	川口智隨	工藤榮昭	深澤義雅	岡觀修	和田諦禪	森泰遵	堀内泰鑑	戸田周妙	太田純志	竹内性明	井上龍將
------	------	------	------	-----	------	-----	------	------	------	------	------

學校職員及び受持學科

受持學科

院長

教頭

學監

宗乘、餘乘、倫理、

宗乘、台乘漢文學

宗乘餘乘國文學

台乘地理歷史

物理、博物、

餘乘、國語、作文、

哲學、英語、

宗乘

數學化學

漢文、地理

餘乘歷史

餘乘

學務委員

氏名

小泉日慈	關本龍門	加茂顥透	關本龍門	龜口龍謙	遠藤是妙	高瀨教闌	水野潮音	高木友章	宇田川鍊要	望月寛榮	堀部雪芳	服部雪淳	清水水靜	鈴木文亮	脇本觀靜
------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------

同 校 醫

小 松 諦 照
黒坂 一等軍醫

本學年各學級々監及び正副級長

高等部三年級	級長 辻 能學
高等部二年級	同 結城 瑞光
高等部一年級	同 深澤 義雅
豫習科	龜口教授 級長 安藤 恭善
中等部五年級	同 遠藤教授 級長 下田 光泉
中等部四年級	同 宇田川教授 級長 渡邊 泰深
中等部三年級	同 高木教授 級長 間宮 惠忍
中等部二年級	同 服部教授 級長 松村 壽星
中等部一年	同 副級長 秋山 清吾 望月 智善

大正十年度の授業成績は兼ねてよりの報恩大法要で頗る打撃を受けたが能明一致最大の努力を傾注して從來の好果を獲得せんとの意氣込みで勉強しつゝあり

又昨年來學生の希望たりし運動場寄宿舎設置の事に就ては近々其の實現を見るであらう、運動場の如きは既に實測も終り着手するのみとなり、寄宿舎は山規の定むる昨今年十一月の常置會に當局の呈案建議案として通過する事を期待して居る何れにしても來學年度迄には内部の改革即ち特典待遇外部の設備も充實するであらうし従つて學生の増員等も順次行はれ且つて希望せし阜師修師の御意志も實現されると欣快置く能はざる所である猶豫告してある祖山同志會も役員の詮考もあつて着々進捗して居る然し名簿作製に於て最も困難を感ずるのは明治九年頃から明治三十年頃に至る間の在籍者で名前漏や住所の不明が多き事である、若し其の當時の方々に御氣付きになつたら恐縮乍ら一報を初望して止まぬ次第である。

三月の窓から

▲奥深い甲斐の國の音樂的な統一を持してゐる自然の姿態、白雪を頂いた崇高な山姿はいつのまにか處々に古株があらはれたり、若々しい芽生が軟風にしなだれたりするようになってしまつた、其面を黄金色の日光がしづかに滑つて動く、眺めてゐる人の心もふわふわと軽い波を打つ風物にも人の顔にも芽えて明るい色が現はれる、地の色も若草を萌すやうな懐しい潤ひが出てくる。然ししめつてゐるやうで露けのないのが如何にも春の心の如く感ずる

斯様な穩かな平和な自然の姿態から一度人間の世界を眼そむけると、そこは狂亂である、渦巻である、混頓である。勞働だ、事業だ殖産だ、工藝だと騒ぎ立つてゐるのが殊に目立つ。此の叫びは人類の思想にも影響を與へずには置かない、其證據にはどんな雑誌にも政治問題や産業問題の載せられないものは一つも見あたらないではないか、

然し今私は約四十種類の學生の原稿を手にしたがさすが超世脱俗の氣風が漲つてゐる延嶺だけに、斯様な産業論がなかつたといふことは、悲しいやうにも思つたが又非常に嬉しくも思つた蓋し、人間は何んな方向へでも徹底すれば必ずあらゆるものと融會融和する境地が開かれ春心がいつも人間にまづはつて離れないと信ずるからである、

▲此雑誌は聖誕七百年記念號として花々しい作品を集めて世の中へ擔ぎ出すつもりであつたが、此雑誌の性質上、それは全く止めて、部員の内心に深く深く刻込むといふ主意をとつた、そして編輯の都合から全原稿の中十五六通ばかり割愛せねばならなかつた、岡君の生活の情味、福島君の信仰の力、堀内君の青年の航路、和田君の親子天性、富田君の第二の日蓮を望む、森君の大日本帝國と日蓮聖人、渡邊君の三樂、小林君の日記帳から、松井君の聖誕七百年を迎へて我等が希望下田君の秋の夜半、南陽君の永生の友、戸田君の聖誕七百年を詠む短歌、などがそれである。讀者諸君に

お許しを願つて置く。

▲始め、原稿を評論、宣傳、感想、創作と分類してみたが、どの原稿も何れともつかず、分類はやめて並列してしまつた、しかし、それが爲め雑誌の統一を欠く憂はないと思つたからである。尙、編輯上のことに就いては、絶えず部員諸賢の御批評や御希望をいただきたい。

▲私はエゴイストだといふことは能く知つてゐる知つて居るが而もそれを止めたくない、いつまでもエゴイストでありたい、友人や長者といつても對角線をなしてゐる、然ししかし、私には唯一の友がある、それは自然である、私が笑へば自然も笑ふ、私が泣けば自然も泣く、私がのんびりした氣分になれば自然ものんびりする。くつきりとした若草の青味を見ると私も亦何物かを創造せねばならない氣分になる。(かなめ)





同窓會記事欄

(一)

惟ふに。人事の凡ては、何處迄も不如意で有るか、…時代の思潮も公論も、單なる空理、空論、空想として、時てふものより常に取り残されるので有る。タイム線上に立つて、過ぎにし去年を省れば、只時代の輿論として、流言として、又時代の謗物として、改造てふ熟字が、此の宇宙に、遊動して居た耳であつた、未だ徹底的に、何等の改造も、見ないのでは無いか。嗚呼！

現代の社會は、髓に靈的食物に餓えて居る。同時に肉的食物にも非常に、飢えて居るので有る。然し靈的食物に不足を告げなかつたならば、其處に精神的活動に因つて肉食的即ち物質的食物を求め獲る事は必然的で有る。古人が「足衣食而知禮節」とて、先づ此の飢渴者に。パンと、水とを與へよ、と叫んだが、是れは要するに、精神的教養を充分にし、次ぎに飽食の道を得たならば

禮義も知り、節操も重んずる事が、出来るので有る。然し、現在に就けば、油なくして機械の運轉は望み難い事は、事實で有る……兎に角、社會は日一日と、複雑繁多に爲つて行くので有る。随つて救護を求むる聲は、次第に凄しくなるので有る。吾人青年求道者の血肉は、常に恒に躍動して止まない。如何にもして、此の悚慄すべき場

裡から、彷徨へる可憐の群羊を、花の園に導き出さなければならぬ、重且つ大なる責めを、吾人は有つて居るので有る。然も未だ、國家社會より、常に保護を受け、指導を待つ吾々は、只心計りあせつても、…亦大なる希望は、不斷に把持して居ても手を出す事が出来ない。即ち自己を知り、自己を救ひ得ざる者が、如何にして、化他の途につき得べき？

所謂 宗祖の、「一丈の溝を越えざる者何ぞ十丈廿丈の溝を越んや」……御訓示の如くで有る。吸收時代修養時代に在つては化他に出づるに害こそあれ、化益する所は、僅少で寧ろ信仰を冷ますの感が有る。然し

修養積み自行愈々到れば、踊々として實社會に召入して、不自惜生命の活動を開始する決心である。

此の重鬱せる源山に細く煙を立てる同窓會は来る年もく現狀維持の様では有るが、日に月に發展しつゝあるもので有る。厭れも幸に、諸賢の御示導と、援助とによるものと深謝する次第で有る。

大正九年度に於ける總會は、四月廿八日の吉辰を卜して、開催した。主なる決議案は。總則第八條、講演部細則、第十條、第十五條(削除)及び、運動部細則第八、九、十條、並に文學部細則第十一條、雜誌縱覽所規則第二條の、新加訂で有つた。五月廿五日より一週間、豆州相州方面に、修學旅行を行つた、…其の節、御芳志を忝ふした、各寺院並に、信徒各位に、銘謝致す次第である。七月に到つての學生大會、尤も同窓會の名目な離れて居るが、…學生一同慎重な態度で、親しく學院の發展策に努力した事は、既知の如くで有る。次に本學院校旗の樹立、…尤も本學院として、緊急問題は

夥多なるも、萬事が一時に實現する事は、猶木によりて、魚を求むるが如しで有る。校旗の如き、即ち學生の統一標的にして、且つ學院の生命である。故に、吾人は此の校旗の前に膝曲いては、自覺自重の精神を捧げ、而して勇往邁進すべき、前途を祝福するのである。此の開眼樹立式は昨秋紅葉色深き十月七日親く聖祖の御前に於いて舉行した（紀念運動會開催）

此の大正辛酉は、世界的紀念歳で有る。故に何處迄も、有意義に送られねばならぬ。茲に吾同志會も微力ながら衷心以て、聖祖の鴻恩に報ゆる爲めに、客歲十二月初旬以來聖誕奉祝紀念事業のため準備委員を選出し準備會を數回開いた。事業は、左の項目で有った。

一、圖書閱覽所建設

一、祖山出身同志會創立（別項卷尾にあり）

一、雜誌棲神發刊（特別倍大號）

一、聖祖御肖像並に御眞蹟寄贈

及頒布（各雜誌新聞社へ）

一、新聞傳導

一、宣傳布教

一、名士講演（招聘）

一、警告箋配布

一、當日校內慶讚裝飾

興餘 琵琶歌、茶番、以上

然し、一事業を遂行するのにも、源動力の問題で有る。遺憾ながら右項目中、圖書閱覽所建設、新聞傳導の二項目は、中止して是に代ふ可き、永久的事業を開始した。先づ其の基金積蓄方法として、勿論紀念事業で有るが、宗祖の御肖像を謹寫して、諸彦に分讓する事にした。……漸く發芽し始めた學院同志會も、只自動的のみでは、到底覺束ないのからで有る、他動的な後援を仰ぐ次第で有る。思へ！五尺の小人、九層の臺を築く事あるを、！最後に祈る、四海歸妙の日近かん事を。因に大正九年度本會の役員は左の如し。

會長

小泉院長、現下

副會長兼會計監督 關本數朗

運動部長 遠藤教授

主任幹事 小林貞宜

文學部長 宇田川教授

主任幹事 岡 觀修

講演部長 堀（龍）教授

主任幹事 結城瑞光

會計主任幹事 井上龍將

（已上鳴月記）

（二）

三月十七日には本學院第九回卒業式が行はれた、續いて講演部々長堀龍淳師留學生藤田光肇師並に卒業生諸君に對して送別茶話會が開かれた尙又同志會幹事改選も行つた四月には制帽が改正された……私達は若々しい然も緊張しきつた氣分を以て此の紀念大節を迎へる爲に演説や幻燈布教は勿論の事警告箋を配布してゐる又毎夜八時から身延街道に立つて道路宣傳をしてゐると熱心な人々が傾聴してくるので誠に喜ばしい今回本山の大法要に登山された寺院方は私等の此の淨業に多大の讃同をされ中にも第

二會登山寺院方が發企となり岡山の高見僧正埼玉の富川僧正の御二方が種々幹旋の勢をとられ布教宣傳其他事業の補助費として金品を寄贈せられた(報告は天鼓紙上所載)

に對して厚く感謝を表す、吾々は物質の多少を問はず學院將來の爲宗門前途の爲に應援して下さる先輩諸賢の好意は總て宗門中堅として活動する時其れが何よりの報恩であると信じてある益々自重し努力して如說修行の奮闘を体顯する事を誓ふものである終りに此の棲神が既に發行される筈であつたが種々の事情で延引した殊に大法要に懸がつたので思つたより遅くなつた事を不慚御諒察を願ひたい

因に本會の役員を記さば

同窓會々長	小泉院長現下
同副會長	關本教頭
兼會計監督	結城瑞光
會計主任幹事	宇田川教授
文學部々長	森田一擁
同幹事	遠藤教授
運動部々長	

同幹事
講演部々長
同幹事、

富田海音
未定
江原亮男

(K・Y)

△文學部から▽

初鵝の一聲に、愈々聖誕七百の幕は開かれ、而も、天地の聖物をして、悉く靈化せしめんとするのである。嗚呼 意義ある大正十年、苟も本化末流に浴する吾人は、只無意味に、此の大節を慶讃する事は、吾人の内心、之を赦さない所で有る。即ち、是の記念歳をして、有意義に暮した曉、ミゼめてもの事、大聖の鴻恩に、一微塵も報ひ得た、其處に於いて、始めて、祝福し且つ亦目出度けれの、眞義が現れるのでは無いか。茲に於いて、吾人特に青年求道者は、大なる自覺とそうして、強硬なる自信の下に、此の年をして、實際的に、意義あらしめればならぬ。

茲に吾同窓會文學部も、慶讃事業の一として、將又布教傳道の一として、雜誌棲神紀念特別倍大號を、發行する事にした。尤

も此の棲神は、毎年一回發行となつて、居るので有るが、内部の都合上、大正八九の二ヶ年は休刊した。故に會員諸彦に諒諸を乞ふ次第で有る。

幸ひに紀念事業の一として、同志會(別項にあり)なる者が生れた。是の會に依つて學院關係者諸賢と舊情を溫め、且つ實狀を相通する好機會を多々ならしめんとするのである。特に此處に切望するのは、勿論會員及び、會友の親善を計る爲めではあるが、自今已後棲神發行に際して、其の人を問はず、原稿を賜り度ひのである。是れ、既に實踐場裡に在る諸賢は、寺門の經營、或は布教傳道の、經驗をされ従つて其れを披瀝されるならば其處に幾多の興味は味はなる事である、後學の徒は、將來曲折波瀾の多い、大海を渡られねならぬから希望するのである、諸賢幸に諒とせられよ。

次に此の雜誌棲神が讀者諸賢の、研究の一助ともなるならば、幸甚と謂ふべきであるが元來會報に過ぎないのであるから不備であるにも不關、購讀希望の申込みが、聞

々あるが、年一回の發行で、而も非賣品であるから、御希望の方は、御一報給らば、發刊毎に、送付する右御承知願ひたい。

欄筆に際して、失禮ながら本會へ、書籍雜誌等御贈與被下た諸彦に度みて、感謝の意を表する次第である。

因に雜誌寄贈者の芳名を錄さば。

大崎學報	東京	日蓮宗大學殿
天業民報	同	天業民報社殿
日宗新聞	同	日宗新聞社殿
太陽。中央公論。大觀	同	望月軍四郎殿

雄辯。實業之日本。現代。

三寶	同	望月軍四郎殿
車洋哲學	同	森江書店殿
天鼓	千葉	天鼓社殿
宣明庵	同	丸山勝龍殿
唯一	大阪	日蓮唯宗一團殿
あさひ	同	あさひ社殿
唱導	同	唱導社殿
國教	朝鮮	國教社殿

宗學雜誌	静岡	高田惠忍殿
日宗青年	山梨	日宗青年會殿
脱苦	同	脱苦社殿
戰友	本校	渡邊泰深殿
若人	東京	加藤安四郎殿
日蓮聖人百字讀傳	百五十部、静岡	
傳道	静岡	高田惠忍殿
	大坂	傳道閣殿
	已上	鳴月記)

講演部から

古來思想表現の方法として採用せられ來つたものには辯論と文章との二つがある其の中でも辯論は文章に比して直接人心に訴へ直接の効果が得られる、此の事は議政上の大獅子吼克と一國の政治を左右するを見れば明らかである、殊に宗教家にありては其の思想發表の形式は辯論を以つて第一とする釋尊に於て已に然り宗祖に於ても又其れを見るされば正義の光明、人心の趨歸を啓示する本化門下にありては一曾に、辯論

の必要を認識せねばならぬ。巧言令色鮮無仁な教之訥言敏行不言實行を主張する思想に依つて馴らされた道德律を以て自由民權を抑壓するが如きは社會的活動を第一義とする青年僧侶の憤慨に堪えざる所である、文化生活の今日個人的覺醒は人類共存の本義を闡明して暗黒なりし舊套の思想を一蹴し去り社會連帶の觀念に基礎付けて我に關する公平な且つ美しき樂園を人類の世界に創造せんとし、均等の機會を要求して止まないものである

如斯時代の趨勢は自由豁達に自己の所信を眞劍に躊躇なく公明に發表すべきで其處に雄辯の生命が溢れ流れて居る、陰慘より明快に不純より純正に轉換する道程は言論の力に俟つ所多大である

是佛子說法 常柔相能忍 慈悲於一切 不生三懈怠心

安樂の行に修練せる大聖の雄辯は今仍に人類の覺醒を強要してゐる、聖誕重輝七百年 何と感銘の深い年ではないか

檀林當時の燈燭會が祖山學院講演部と改稱

されて既に星霜十年、不斷の努力は理想に現實に雄辯の華は咲き亂れ熱蕪の炎は燃え上つてゐるのである、學院の充實と相俟つて講演部も社會的に順次發展して來た、因循姑息な制約より解放されて内部に深く潜んで居た延嶺の特長たる新しい氣分が違つらざる將來に於て實現される事と信する、

其の第一歩とも云ふべきが大正八年十月東京に於て開催された全國中學雄辯大會より招待せらるゝや今學院より森田一擁君出席し君一流の雄辯を振はれ都下の新聞に其の能辯を報導された又昨年十一月日蓮宗中學主催都下中學聯合懸賞雄辯大會には岡觀修結城瑞光の兩君出席された名譽（雄辯二月號所載）ある月桂冠を捷ち得た。猶猶本年五月神田明治會館に於いて日蓮宗中學の主催にかゝる聖誕七百年紀念全國中等學校雄辯大會には江原亮勇君が出席して同君獨特の富樓那辯を振はれ快採を博した文化的要求に従つて膨脹して來た講演部が完全を期するには猶幾多の歲月 要するは勿論である、然し吾等は今後周到の注意を

拂ひ冷靜な理性の光明に照し眞理正義の勇者ととして雄辯を修練する覺悟でなければならぬ

□從來實地布教場へ選出した辯士の資格者は高等部を限られしが中等部五年級の眞摯なる要求に應じ山内布教の前講を許可す

□講演部の懇切なる依頼に應じ快諾せられたる諸先輩を名記すれば

六月日二 至言道尊 田中智學先生

七月十日 世界の大勢と尼港問題

堀内陸軍中將

七月廿三日一週間講習會林 鳳宣僧正

十一月十日祖山へ希望 清水龍山僧正

同 思想の歸結と合せ鏡 長尾榮進師

二月十六日 思想問題と日蓮聖人 清水麗昇師

三月廿四日神州民の使命大迫陸軍大將

天恩無窮 本田仙太郎氏

立正安國論の運動 飯田蓮藏氏

右の方々に對して深く感謝す講演部の報告

として諸君の活勝を詳記せねばならぬのであるが千變一律式の報導では事足らず將來内外共に充實した實質を發表する事を欣懐とする (丁生)

運動部から

今や盛んに富士、アルプスなどの山岳踏破を企て江湖海上に短艇游泳を競ひ各種の運動は國內を挾してとして外國に發展し堂々と國際的競技に加はつて大に其の霸を爭ふ様になつた勇壯なる國民の意氣は斯ふ云ふ處に發輝せらるゝと同時に健全なる体軀と精神との所有者は斯うして造りわけられる。何事をするにも身体が基礎となることはいふ迄もないが常に部屋の中で青白い顔をして黙まつて居る様では身体が懦弱になり意氣は消沈してしまふばかりである殊に青年として之ほど哀げない、やはり筋骨逞しい黒い顔が現代の國家にも宗門にも要求せらるゝ顔であらふと思ふ、この意味に於て大いに運動をやるべきである、獎勵するのを待つて仕方なしの運動では餘り其好果がな

い、吾祖山でも自發的な運動家を望んでゐる目下進取的の國運に際し吾々は最も大きな使命を帯びてゐる其責任の重大な事は一日も忘れてはならぬ宗祖の御理想の萬分の一なりと果さうとしたならばどうして纖弱な体で居られよう須く大智徳勇健でなければならぬ獅子王の如くならねばならぬ、萬難に打勝つた本化の大丈夫こそ男の中の大男ではないか。マアこんな考へは全員諸君殆んど御同様であらうが吾々はそれをお互に体现せん事を切望するものである、それにつけても我運動部は情けない様な感がせぬでもない、表面から見るといかにも其發展振りを見せずに現狀維持の様に見えるけれども其實日に月に發展してゐるのであるより以上發展をしようと思ふが、何しろ財政の問題やら、周圍の關係上止むを得ない實に今の我部は手も足も思ふ様に出せないといふ鹽梅、然し此儘で續けて行く事は出来なないが「伸びんと欲して先づ屈せよ」の筆法で、今のところ、實は其發展策に頭痛を病んでゐる譯である殊に運動場設置、寄

宿舍の新設等は昨年六月下旬の學生大會で大部分騒々しい問題を起して當局に肉迫し其設置等を促したが、種々な事情のもとに未だ其實現の全きを見ないが其の端緒はすであらはれかけてゐる ▲去年の四月から運動部としては大した仕事もないが鐵棒の修繕や遊動木の新設等である、庭球は八、九、十月頃は殆んどテニス狂ともいふべき有様で雨の降らない日は毎日ボールの音が絶へなかつたそれで其庭球がチャン運若干名の專用物の様になつてテニスをやらない人には一向趣味がない、なるべく會員一般に興味を持たせたいといふのは常から言つてゐた事であるこんな具合であるからボールの使用は夥しく多かつたそれは運動のため寧ろバンクも結構だが裏の竹藪へ脱線させて知らん顔の人もある、それがため會員の一部からは不平も起き小言も出たが全く無理ならぬ事と思ふ▲弓術の場所のせいかな矢の簾入りを勘定してか、サツパリ振はな

人が時々、間の抜けた様な木刀の音ばかりそれも今は昔さへせぬ有様▲五月十五日より會則第十條に準じて五泊六日の豫定で伊豆伊東方面に聖跡參拜を行なつた、兼れて箱根山踏破も試みた旅行中夜間の道路布教は非常なる好成績を修めた(委細は記事中にあり)▲十一月七日校旗樹立式を兼ねて陸上大運動會を校庭で開催した午前八時祖師堂にて嚴かな樹立式法要があつた、終つて院長親下より親しく校旗の授與あり校旗々手として小阪田龍教君が奉持し護衛には各級々長を以てし隊伍整々校庭に進み學生全部校旗に對して最敬禮を行ひ今日只今より祖山健兒のシンボルとして堅い誓を立てた、尙身延青年團總代として遠藤久雄氏の祝詞の朗讀があつて樹立式は終つた、續いて遠藤運動部長の開會の辭あり午前十時青空に響く銃聲の一發と同時に運動會の火蓋は切られたのである、觀客は極めて少數であつたが潑刺なる健兒の意氣は高い秋の空を衝かん勢ひにてプログラムの通り競技は進行した、ユニフォームに各自思ひ／＼の

マークを輝かし殊に五年級の勇敢ある樂隊の音律と會報所から發行する記事や漫畫は此日の呼物であつた午後になつて漸く混雜して來た午後の競技は觀客の叫びやら管絃樂のコーラスやらで非常に盛大になつて來た、大きな男が倒れたり走つたり亦無邪氣な可愛らしい小學生の遊戲等があつた最後に異裝百出の假裝行列には御膳の宙返り觀客は百雷の響く様な叫びをあげて御山が震へる程だつた午後五時御眞骨前で記念撮影があつて萬歳三唱して散會を告げた▲尙今後當部の希望としては澤山あるが主なるもの運動場の設置が一番の急を要する仕事それにつれて基本体操の實施、出來得るならば体操を正科にして欲しい、やつぱり一應「氣を付け」や行進などはやるべしと思ふ、それは一寸した集合でも其心得がないから不体裁で仕方がない、他から見て全く見苦しい亦自分でも氣持が悪いと思ふ細目に渡れば種々あるがこれ位にして置かう宗教學校だから、僧院生活をしてゐるが、そんな運動は必要だ、などいふ人は運動の價

値を解しない人であるまいか、要するに吾々は太いに食ひ、太いに學び、太いに運動すべきである、寧ろこれ等が吾々學生時代の急務で体を壯健にするといふのも嚴な報恩生活の一分である (TK生)

金品寄贈者芳名

次第
不順

大正八年度

一金壹圓	學院	大澤	玄章殿
一金壹圓	同	高瀬	教團殿
一金壹圓	同	伊藤	海開殿
一金壹圓	同	泉	義敬殿
一金壹圓	同	森	亮遠殿
一金參圓	神戸市	菊地	泰旭殿
一金貳圓	本院	太田	日定殿
一金貳圓		小林	かめ殿
一金貳圓		木村	かめ殿
一金參圓	鎌倉	貝山師外四名殿	
一金五圓	東京	景山	佳雄殿
一金九圓	東京市	加藤安四郎殿	

一金貳圓	小林	殿
一金壹圓五拾錢	學院	結城 瑞光殿
一金貳圓	同	遠藤 是妙殿
一金拾圓		高倉 さよ殿
一金五圓		田中 いそ殿
一金五圓		八木 嶺賢殿
一金壹圓	甲府市	山岡 義哲殿
一金貳圓	本院	太田 日定殿
一金貳圓	興津	藤田 東撰殿
一金拾圓	學院	故服部慈海殿
一金壹圓		貴家 是俊殿
一金拾圓	學院	教師課一同殿
一金壹圓	山梨縣	奥野 要山殿
一金貳圓	學院	藤田 光肇殿
一金五圓	横濱市	加藤 あさ殿
一金壹圓	東京市	猪口 海靜殿
一金五圓	秋田縣	藤田 玄通殿

大正九年度 自四月至大正十年一月

一金五圓	東京市	阿部 むめ殿
一金五圓	同	布施 りう殿
一金五圓	同	長瀬 東洲殿
一金參圓	佐賀縣	前田 龍存殿

一金五圓	佐賀市	久富	きふ殿
一金參圓	東京市	景山	魏雄殿
一金參圓	學院	堀	龍淳殿
一金拾五圓	靜岡縣	田中	智學殿
一金參圓	學院	水野	潮音殿
一金貳圓	山梨縣	內藤	善清殿
一金五圓	東京市	田村	日鳳殿
一金五圓	山梨縣	深澤	湛然殿
一金五圓	北海道	高木	きく殿
一金壹圓	山梨縣	坂本	玄善殿
一金壹圓	學院	宇田川	鍊要殿
一金壹圓	山梨縣	佐野	嘉重殿
一金五圓	東京市	清水	龍山殿
		外五名	
一金貳圓	靜岡縣	望月	宗康殿
一金貳圓	學院	水野	潮音殿
一金五圓	大阪府	森	亮遠殿
一金參圓	東京市	景山	魏雄殿
一金貳圓	本山	太田	日定殿
一金五圓	山梨縣	大林房	遺弟殿
一金參圓	學院	小川	友章殿

大正九年春季修學旅行隊

金品寄附者御芳名

一金五圓	本學院	院長	現下殿
一金參圓		平林	秀光殿
一金貳圓	沼津	妙海	寺殿
一金拾圓	玉澤	妙法華	寺殿
一金參圓	伊東	朝光	寺殿
一金五圓	同	佛現	寺殿
一金五圓	同	前田	龜吉殿
一辨當	沼津	妙海	寺殿
一同上	同	妙覺	寺殿
一泊同上	玉澤	妙法	寺殿
一泊	伊東寺院	御一	同殿
一汽船	伊東	前田	龜吉殿
一泊	小田原寺	院御一	同殿
一茶菓	箱根	本迹	寺殿
一泊	三島	妙行	寺殿
一辨當		富士皇國殿	

大正九年秋季陸上運動會

金品寄附者御芳名

一金拾五圓	本院	殿
一金拾圓	院長	現下殿
一金五圓	關本教頭	殿
一金五圓	大野會計	殿
一金參圓	脇本執事	殿
一金參圓	杉本執事	殿
一金參圓	小松執事	殿
一金九圓	教師課御一	同殿
一金五圓	覺林坊	殿
一金五圓	武井坊	殿
一金五圓	玉屋	殿
一金五圓	新玉屋	殿
一金五圓	橋本千代	殿
一金參圓	支院中	殿
一金參圓	身延青年團	殿
一金貳圓	村松玄由	殿
一金貳圓	清水坊	殿
一金貳圓	田中屋	殿
一金貳圓	富士皇國殿	

祖山同志會設立趣意書

『行學ノ二道ヲ勵ミ候ヘシ行學絶

ヘナハ佛法アルベカラズ』

行學の二道は吾家發展の要素たり

祖山と宗門教學との關係は今更喋々を要せずと雖も宗祖が九ヶ年在山の御靈意を惟ふに單に自身老後の安逸を期するにあらず寧ろ靜寂閑散の處如說修行と同時に門葉教化鞠育に在りしや知るべし。朝意傳三師が宗學的功績を始めとし善學鏡師の西谷の地に善學院を草創せる及び心性遠師の隱棲所を改易して學室の規模を置き天下負笈の遊子に親しく鞭策を與へし等已來吾が身延學園が西溪の地に幾久しきに亘つて春空爛熳不斷の學問的史華を事の寂光芬茶利の峰麓に競ひし事は今尙ほ世人の耳朶に遺る所ならん

春應阜師(明治廿五年御入山)の祖山大學院を創立せられ宗内の英戈を抜き自ら教鞭を執て育英に従

事せられてより去雁燕來星霜を累ぬる三十年凡そ現時宗内樞要の地位にあるものにして祖山の學窓に起臥せざりし者殆ど稀なりとす

而して大學院は閉鎖の悲運に遭ひ讒に小學林小檀林宗學林等の名を以て命脈を保持せるのみなりしが幸ひ復興の機運に遇ふて大正二年に至り呱呱の聲を舉げたるもの現在の祖山學院なりとす之れ大學院の復活にして小學林小檀林宗學林等の向上發展と云はざるべからず

時弊の推移する所幾多興亡變遷ありしと雖も祖山擁立の中心は更に異るなし然るに歲月の久しき人員の多き一度學窓を出れば先進後輩の間風馬牛も啗ならず若然らば先師が學園創設の意と祖山が多年盡せし宗學的史華は共に日々萎微せんのみ豈に遺憾痛痕の極みならずや

是れ併しながら這般機關の缺乏其因をなすと云はざるを得ず宗祖棲神の法閣に學窓を同ふして蕭々たる夜雨を聞き俱に皎々たる秋月に坐して書味を談笑せし舊情を溫め以て意志を疏通し精神を結合

し而して宗家の爲め祖山萬代不朽の基礎を確立せ
んには先輩諸師誘導の下同學後進提携し以て異体
同心協力一致にあらずんば能はざる所ならん是を
以て生等微力を顧みず身延出身者（大學院小學林小檀
林宗學林祖山學院
等に於て卒業と否とを問はず一度
祖山に笈を負ひしもの相集ふて）相互の親睦を厚ふし祖
山教學の振起を企圖し以て聖誕七百年を紀念せん
として本會設立を發起せしなり

大正拾年壹月 日

身延祖山學院内

祖山同志會發起者一同

先輩諸師、生等の哀情を酌量せられ御協讃願上
候會員名簿等の都合も有之候に付き賛否及住所
氏名至急御一報煩はしたく候

尙本會設立に對する希望及其他にも御高判を
仰ぎ度く此段貴意を得候也

發會式の時日等は追て發表可仕本會に對する
通信等は總て祖山學院宛に願上候



注 意

棲神を毎月發行する事諸種の都合上不可能なる故學院の記事は本山の機關雜誌天鼓誌上を借りる事に致します故右御承知被下度し因に右雜誌は身延山本行房内天鼓社(振替東京一二八二五番)發行(一部拾五錢一ヶ年一圓六十錢)であります

大正十年七月十五日印刷
大正十年七月二十日發行



發行所

山梨縣南巨摩郡身延村
身延祖山學院

山梨縣南巨摩郡身延村

編輯人 宇田川鍊要

山梨縣南巨摩郡身延村

發行人 森田一雍

東京市京橋區入舟町四丁目貳番地

印刷人 伊藤鐵次郎

東京市京橋區入舟町四丁目貳番地

印刷所 伊藤印刷所

▲身延山久遠寺所藏水鏡尊像
▲御聖誕七百年絶好之記念

日蓮聖人御肖像頌布

▲最上蓬萊紙コロタイプ印刷
▲實費頒布代一枚金參拾錢

■祖山學院同窓會發行